

森田悟由禪師題辭
山田孝道師著

座禪用心記
普勸座禪儀

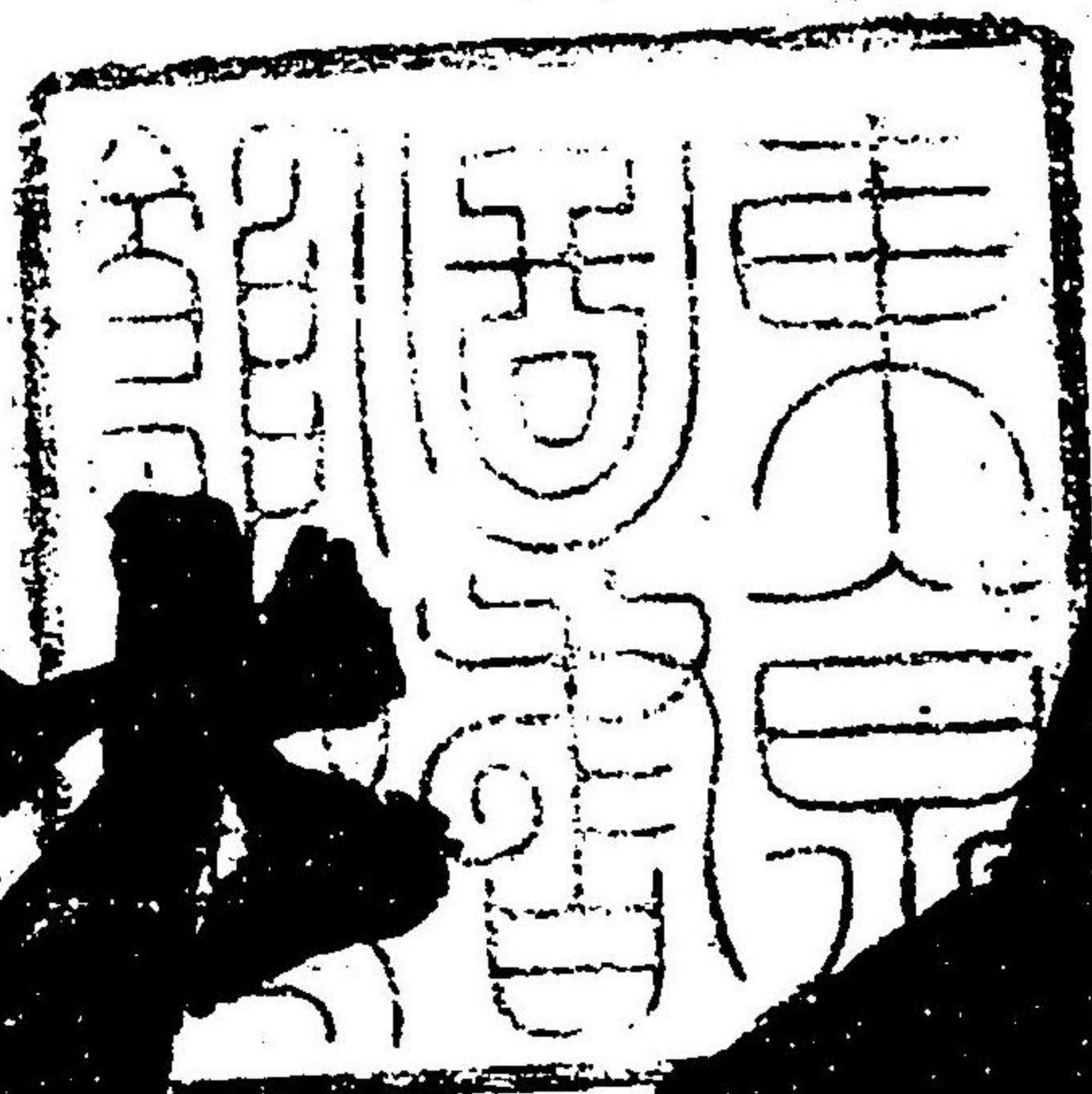
講義

光融館發行

山田考道師著

座禪用心記
普勸座禪儀
講義

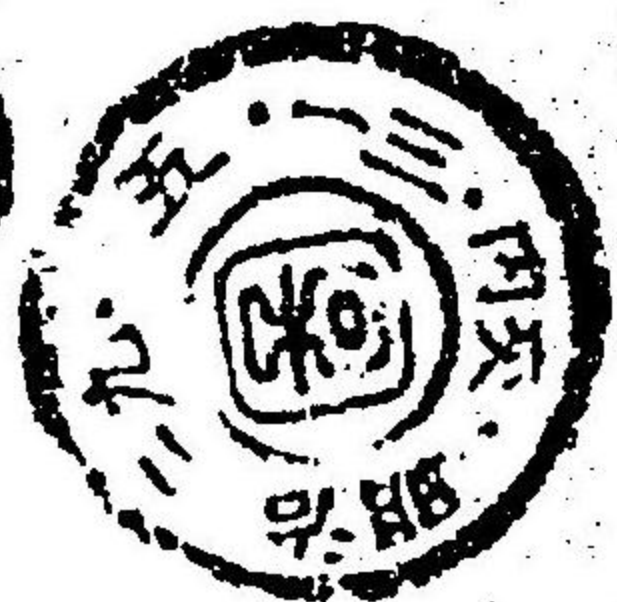
光融館發行



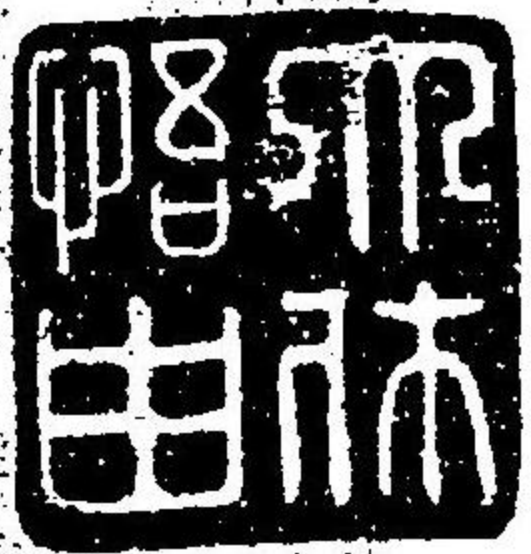
王印

王印

王印

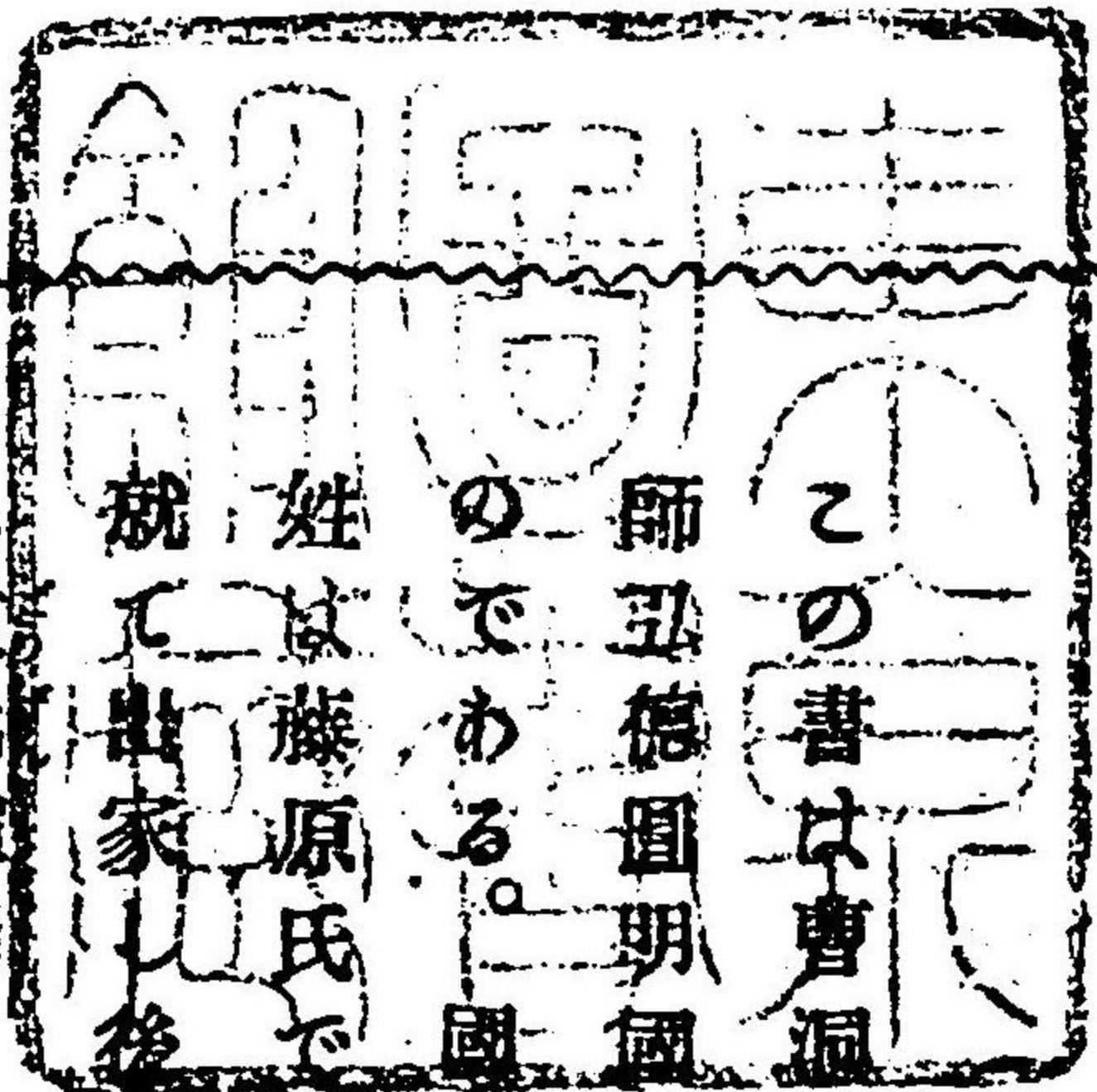


永平行由



坐禪用心記講義

山田孝道講述



この書は曹洞宗兩本山の一である能登の總持寺の開山勅證佛慈禪師弘徳圓明國師の撰述であつて坐禪をする時の用心を示したるものである。國師の諱は紹瑾じょうきん號は瑩山けいざんと云ふ越前多禰郷の人にて俗姓は藤原氏で文永五年に生れ八歳の時に永平寺の三世徹通禪師に就て出家し後遂にその法を嗣かれたから曹洞宗の開祖承陽じょうやう大師即ち道元禪師より四世の法孫である。徹通より嗣法の後阿波の城滿寺を開き次で徹通の開かれた加賀の大乗寺に住し又能登の永光寺えいこうじを開かれた其後定賢ていけん律師の請により總持寺を禪院とせられた。嘗て後醍醐天皇十種の勅問に奏對を呈し頗る感感にあづかられ勅掟

により寺額を賜り又翌年に總持寺を宮寺に列して出世道場とせられた。其後正平年中後村上天皇より佛慈禪師の諡號を賜り又安永年中に後桃園天皇より弘徳圓明國師の號を加賜せられた。扱能登の永光寺は洞谷山と號して境地が至て幽雅で頗る國師の氣に叶て居たといふが此用心記も永光寺に住山の時に撰述せられたといふことで指月和尚の『不能語』には洞谷開山坐禪用心記と題してある。國師の著述の中にて世に行れて居るものは傳光錄、瑩山清規、信心銘、拈提、三根坐禪說と此の坐禪用心記であるが三根坐禪說は至て簡短なもので此の坐禪用心記と合本にして世に行はれてゐる。扱國師の著書は多く開祖承陽大師の述作に據られて謂はゆる祖述的のものであるがこの坐禪用心記は全く承陽大師の『普勸坐禪儀』を祖述せられたといふとじや。併し普勸坐禪儀より此の用心記の方が微細であるから初心の人には却てわかり易からう。なれども總して禪

錄といふものは通常の經部論部を講ずるとは違つて到底充分に解くことは出來難い夫れ故に禪錄は講義とか講釋とは云はずして昔から提唱と云ひ來て居るとじや、それであるから何程解し易いと云つても通常の講義のやうにはゆかぬ、まして口頭で提唱するではあく筆記のことなれば猶更に困難であるが先づ出來るだけわかりやすく解釋を試みる考である。

坐禪用心記

これは此の書の題號である。坐禪の坐は字の通りであるから釋するに及ばぬ。禪は詳に云へば禪那にて梵語であるが漢譯すれば靜慮といふ即ちモノシヅカニ、オモヒハカルとの意であるソコで坐禪とは梵語の禪那の那を略してその上に漢字の坐を加へたものであるから之を梵漢兼舉といふじや、かやうの類は佛教には澤山例があるッ

マリ静坐默念とでも云ふほどの義であるが、それは文字上の意味であつて今この坐禪といふことは決して左様な意味ではない、全体坐禪に外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、最上乘禪等の差別があつて、其の名目は同じけれども、其の實は各々異なつて居るじや、外道禪といふは坐禪を修して種々の邪見を起し又著味と云つて其の境界に執着する害がある、凡夫禪といふは我慢我見を増長し小乘禪といふは獨善主義であつて而も涅槃を得んとする有所得の心を以て之を修する弊があり大乘禪といふも矢張三止三觀といふやうな觀念を修するのであつて、教外別傳のではない、最上乘といふは文字の上より見ても第一あることが分る、即ち達磨門下の禪を云ふのじや。佛祖傳の坐禪の他の坐禪に異なつて居るといふは他家の禪は悟を得る爲めに修するのであつて悟を得さへすればその後は坐禪を修せずともよいと、恰も水を渡るに船を用ふるが如く水を渡りさへすれば船は無用

の物であるから捨ててもよいと云ふやうな考にてツマリ悟を得る手段と思ふて之を修するのである。又悟と修行とは別なもので修行を積だ曉に悟といふものが顯はれて來ると思つて居るが、佛祖傳の坐禪は決してそうでない、玄妙の悟を求むるにもあらず奇特の法の得んとするにもあらず只々この身心を脱落するだけのことである、其の身心脱落といふも自らその中に修行も證悟もあつて決して自然の儘にうちまかせて只默坐するばかりではない、承陽大師は證上の修、修中の證と唱へられたが此の修證不二といふが即ち佛祖傳の坐禪の端的じや。以上は少しく冗長に涉りたるやうなれども坐禪のことを豫め心得て置かなければならぬから茲に聊か辯したのである。

夫坐禪者直令人開明心地安住本分

夫は發端の辭じや、サテ佛祖正傳の坐禪は念佛、修懺、看經、燒香、禮拜等の種々な方便によらず、一超直入如來地と云ひ、又直指人心見性成佛とも云つて、謂ゆる單刀直入に人々本來具有の心性を開悟して、その本分の位置に安住せしむる妙法である。心地とは心は一切萬法を現出する根本であつて、恰も大地が草木百穀等を生ずるやうなものであるから、喩を取つて云ふたものじや、併しこの心といふは肉團心と云つて、勿論固形體ではなく、又慮知心と云つて、吾々が種々の分別をするところのものでもない、又教家が六ヶ敷講釋する眞如とか法性とか云ふやうな靈々昭々のものでもない、教家では八識といふことを立て、眼耳鼻舌身意の六に各々識といふものがある之を六識と云ひ、其の上に末那識(傳奏識と譯す)と云ふがあり、之を七識と云ひ、又その上に阿賴耶識(根本識と譯す)と云ふがあり、之を八識と云ふ、斯く八種の識を立つるか、今この心といふはかやうな判釋にかゝるものでもない、まして心理學などで穿鑿のできるところのものを指して云ふのでない、然らばどのやうなものであるかといふに、細には無間に入り、大には方所を絶し、佛に在ても増さず、凡夫に在ても減らず、到處に滅し、隨處に生し、迷悟是非の沙汰を絶したる吾々の主人公のとてあるト云つて、又誤つて生死の根本たる妄想の賊を捕へまい、凡夫が朝から晩までアクセクとうろたへ廻るは、畢竟己が主人公をお留守にして居るからのことじや、己が主人公か分らないからして、生死の際に隨つて七顛八倒するのじや、若し主人公が儼然として居れば、如何なる事變に臨ても、ビクともせず、安住不動如須彌山と云ふ境界になれる之を安住本分と云ふじや。

是名露本來面目、亦名現本地風光、身心俱脫落、坐臥同遠離。

こゝは上の明心住本を承けて説くのとや。心地を開明すと云へば直に掃溜ハヤカで夜光の壁でも拾ふやうに思ふか知らぬが決して左様なわけではない、見性と云つても悟道と云つても少くも變つた事はない本來具有なるものを具有であると自知するまでのことである故に是名露本來面目と云はれたのとや。現本地風光と云ふも同じこととや、悟たからとて別な境界に生れかはるわけでもない、東坡の詩に「到得歸來無別事、廬山烟雨浙江潮。」とあるが即ち本地の風光である、承陽大師は「認得眼橫鼻直、不被人瞞」と云はれたとや。脱落とはモスケルといふ意であるが身も心も共に此の儘でありながら此の身此の心は吾が物とやといふ執着しやくやく、我慢我見がスツカリ無くなつて恰も桶の底がグワラリと抜けて水も溜らず月も宿らずと云ふ境界にあつたのを身心俱脱落と云ふとや。サーこの時には佛とも法とも迷とも悟ともつかぬイヤうんな塵垢は一點も受けない眞に洒々落

々々や此の境界に至るのの坐禪の所詮しよせんてあらうぞ。遠離もスツカリ、ハナレルといふほどの意とや坐禪といふたからとて只手をつくね足をまげて坐して居ることばかりを云ふでない、身心脱落する上からは坐するも臥するもろの姿形にかゝはらない、南嶽は「禪非坐臥」と云ひ永嘉は「行亦禪坐亦禪。語默動靜體安然」と云はれた朝より暮に至るまで喫茶喫飯運作轉動の上がとりも直さず兀然不動の坐禪である之を坐臥同遠離と云ふ即ち佛祖單傳の坐禪特處とや。

故不思善不思惡。能超越凡聖。透過迷悟之論量。離却生佛之邊際。

故は上を承けて云ふ。身心脱落し坐臥遠離するには善も惡も思ふへきでない、併し不思善不思惡とは善惡をトリノケルといふのである、又善惡の差別がつかぬといふでもない、善惡是非等は總べて己が

分別より成り立つもので其の實性がないのであるから善惡の實性を悟てみればそれにかゝハヲナイヒや。凡夫ヒや聖人ヒやと云ふ格式も飛び越え迷ヒや悟ヒやといふ論量も通り抜け衆生ヒや佛ヒやといふタテヘダテをも離れ一切對待の見をはあれるのヒや善惡是非有無得失と云ふやうなことは總べて待對の二見と云ふ近頃の學問で相對といふが、この見がある中は正見は決して開かれぬによつてサヲリと捨てねばならぬ、これが坐禪の用心である。

故休息萬事及放下諸緣一切不爲六根不作。

こゝ又上を承けて云ふ。上に述べた境界になるには先づ世間の俗事は勿論出世間の念佛看經等の如き事でも尙も有爲造作に涉る事は一切休息とヤメ又放下とウチステ、六根と云つて眼耳鼻舌身意の働をせぬやうにせねばならぬ、斯く云へば又木像のやうにスクン

デ居ることゝ誤てはならぬ。

這箇是阿誰不。曾知名。非可爲身。非可爲心。欲慮慮絶。欲言言窮。如癡如兀。山高海深。不露頂。不見底。

這箇是阿誰とはこれは誰ヒやといふは、そのことである、サア吾人本來面目は太郎といふか次郎と呼ぶか一向に名が知れぬ、この身の地水火風等の結合より出来て居り心は慮知念覺より成立て居るがそのやうなものでもない故に非可爲身、非可爲心と云ふ、考へても分別が届かず言ふてみやうにも言語に盡せず、愚の如く魯の如く更に相場が付かぬ臨濟大師は無位の真人と云はれたが凡聖迷悟の沙汰を絶して居るから山の高くして頂を露さず海の深くして底の見えざるが如く頼と伺がつかぬ。畢竟何人の事であらうか、脚下をお留守にして餘所見をすまい。

不對緣而照眼明于雲外。不思量而通宗朗于默說。坐斷乾坤。全身獨露。

眼で色を縁して色を辨じ耳で聲を縁して聲を辨するを縁に對して照すと云ふが今はそれに反して六根の眼耳鼻舌身意と六境の色聲香味觸法との對縁を假らずして靈通するのじや、是れも些合點のゆき兼ることじやがツマリ物と我の分隔のあい境界の働を云ふたのである、斯く心境共にアリツブレになれば其の見る所も自ら萬物の表に出でゝあるるを眼明于雲外と云ふたのじや、この境界に至れば思慮分別に涉らすして一切の事物に通するから一語一默の上が自ら尋常でない、自悟自得一切の文字名相を絶したる處を宗通といひ其の悟得を言語文字に顯はすを說通といふふ不思議にして通するから宗說共に圓明じや、この境界を坐斷し全身獨露す獨露すと云

ふ、即ち天上天下唯我獨尊といひ又萬象之中獨露身といふもこのことじや。

沒量大人如大死人。無一翳遮眼。無一塵受足。何處有塵埃。何物作遮障。

慮知分別を絶し迷悟凡聖等の情量を亡したるものを沒量大人と云ふが其の沒量の大人は眼見耳聞の上に於て聲色の爲めに動されぬから大死人の如くじや。翳は鳥の薄羽のことであるが聲色の爲めに動されぬ者の眼にハ毛牆西施の如き美色を見るも少しも眼の障とならず又綾羅錦繡に觸れても更に執着の念が起らぬから到る處として其の身心を汚すべき塵埃亦く又萬物一として其の自心を累すものはない、畢竟前境の此方の遮障となり塵翳とあるは此方の内心が動くからのとである、然るに今此方が大死人の如くであれば

前境の物も此方の邪魔をする筈はない。

清水本無表裏。虚空終無内外。玲瓏明白。自照靈然。色空未分。智境何立。從來共住。歷劫無名。

表裏内外等は上に云つた待對の相であるが物と我との待對を絶したる大死人的の没量の大人は天上天下全身獨露であるから少しも縫いも腐めもあいらを清水の表裏なく虚空の内。外なきに喩へたのじや、うの盡界一枚の有様は玲瓏とスキトホリ明白とアキラカにして一點の曇りなく萬物を照して毫も昧すところがない、このときこれが有形の色じやあれが無形の空じやといふやうな分界も立たす能縁の智と所縁の境との區別も立たぬ故に空劫の昔より同居しなぶら頼と名ぶあいらじや、歷劫とは長年月のたとを云ふ。

三祖大師且名爲心。龍樹尊者假名爲身。現佛性相。表諸佛體。此圓月相。無欠無餘。即此心者。便是佛也。

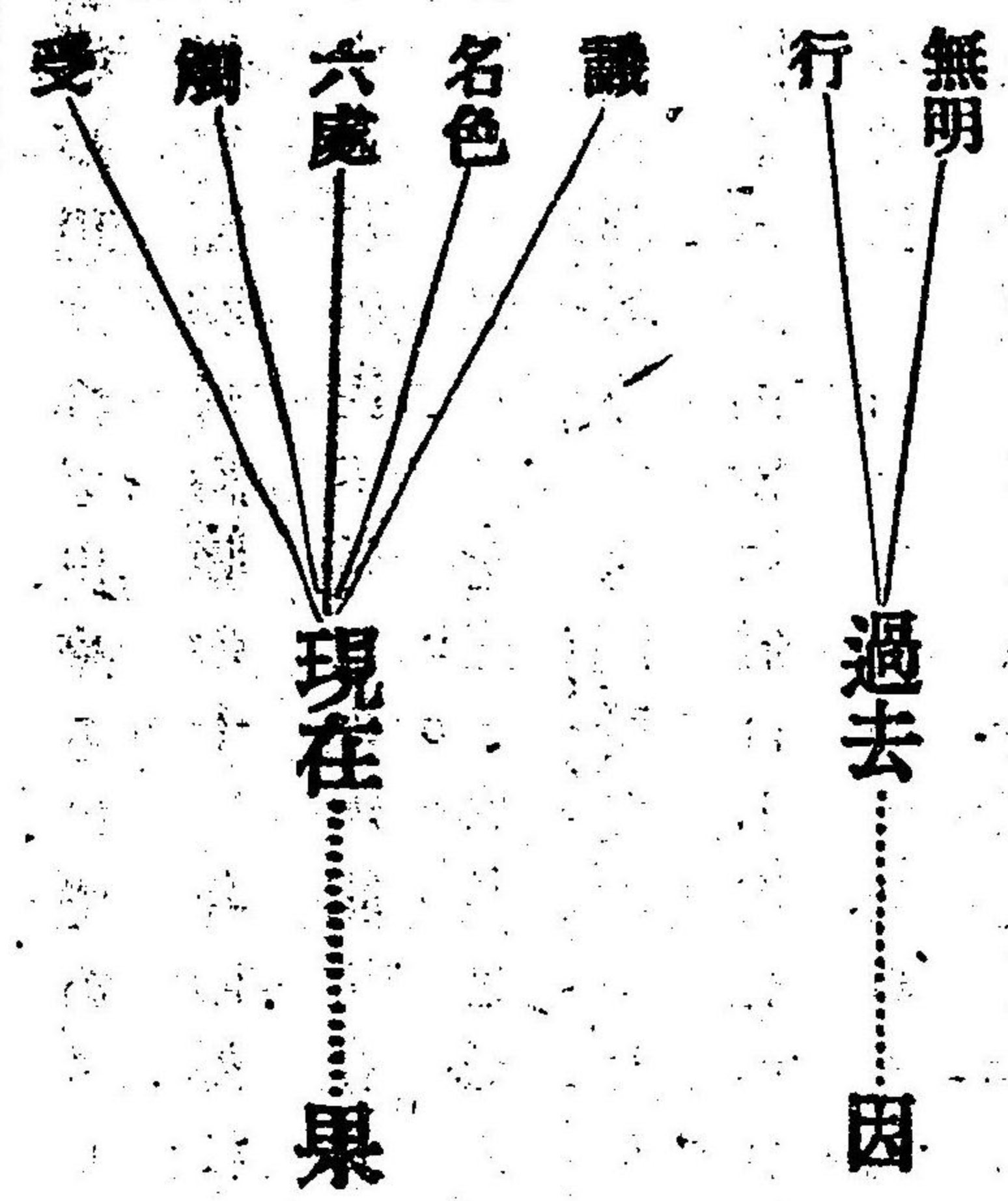
ソコデ支那の初祖達磨より三代の祖師僧璨大師の「信心銘」を作つて且く心と名けられ印度の龍樹尊者の假りに身と名を付けられたサヲ龍樹は西印度の人であつたが曾て布教の爲めに南印度に往かれたとき南印度の人々は只現世の福利のみを求めて居たに依て佛性の妙を説かれても一向に了解しあかつた、ソコデ座上に於て自在身を現じて滿月輪の相をあらわされた人々は只説法の音のみを聞て尊者の姿が見えなかつたと云ふことじやが是れを現佛性相。表諸佛相と云ふ、此の龍樹の現せられた圓月の相は欠めもあく又餘るところもあいが別な者でない即ち吾人本具の妙心の當體にして此の心が取りも直さず佛である、然らば吾人が着衣喫飯造次顛沛も圓月

所謂四大五蘊遂和合。四支五根忽現成。以至三十六物。十
二因緣。造作遷流。展轉相續。但以衆法合成而有。

こゝは吾人身體の生ずる所以を説かれたのじや。四大に内外の二種
あり。地水火風を外の四大と云ひ。堅溼煖動を内の四大と云ふ。大とは
此の四は到る處にわらずと云ふことなく。且の其の作用極めて廣大
なるものであるから大と云ふ。五蘊とは色受想行識と云ふ。色は此の
身の形質。受は領納の義にて苦樂取捨等の感觸のこと。想は想像の義
にて行は造作遷流の義。識は識別と悉する字に分別のこと。蘊とは積
聚の義にて此の五が積み聚てその身を成す所と名けた。又五陰と
も云ふ。陰は蓋覆の義にて其性を蓋ひ覆ふの義。四支は二本の手と足
五根は眼耳鼻舌身との五は一切の善惡の作業をなす根本なるをま
す根と云ふ。又吾人の身體は此の四大と五蘊とが相結合して手足

や五根が現はれて出来るのである。ソレカラ身の内に在る皮膚、血、
肉筋、髓、骨、髓、肪、膏、腦膜の十二、身の外に在る髮、毛、爪、齒、眵、淚、涎、唾、尿、屎、垢、
汗の十二、身の内と外との中間に在る肝、膽、腸、胃、脾、腎、心、肺、生臟、熟臟、赤
痰、白痰の十二、これを三十六物と云ふ。又十二因緣と云ふがある。即
ち無明、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老、死あり。前世に於ける最初の迷
を無明と云ふ。前世に於ける善惡の作業を行と云ふ。その業力により
て母の胎内に宿る氣息ありこれを識と云ふ。胎内に於て一分の心臓
と形質とを具するこれを名色と云ふ。ソレカラ眼耳鼻舌身意の六ぶ
具はるこれを六處と云ふ。六處が具はれば胎内を出で生れる。生れて
當分の間は只寒熱痛痒等の感覺があるのみじやがこれを觸と云ふ。
漸次に長して苦樂等を知るこれを受といふ。又次第に成長して五欲
を生ずるこれを受と云ふ。愛念が生ずれば必ず其の物を求むること
を取と云ふ。取着を起せば業を作りそれを未來に持ち越して往來す

れを有と云ふ有に依て未來の生を受くるこれを生といふ生あれば
 必ず老死ありこれを老死と云ふこの十二が互に原因とあり又原因
 を助くる縁となり三世に亘りて展轉相續して止まぬ之を十二因縁
 と云ふこの十二因縁を過去現在未來の三世に配して其の原因結果
 の關係を示せば左の如し。



これは教相家では頗る微細に解釋することであるが今はさまでの
 必要もないから大略右の通に示したのじや、兎に角吾人の身體は上
 の四大五蘊乃至三十六物十二因縁等の衆多の物が結合して始めて
 出来るものであるからソコデ但以乘法合成而有とある。

所以心如海水。身如波浪。如海水外無一點波。如波浪外無
 一滴水。水波無別。動靜不異。故云。生死去來眞實人。四大五
 蘊不壞身。

此の一段は身と心とは畢竟して同一にして無二無別の道理を説き示されたのじや。所以とは前を承けて云ふ辭前に此の身と心との關係は同一とも相異とも片付けるわけにゆかぬといふことを述べて此の身と心とは四大五蘊等の結合によつて出来て居るものであると示し置きこゝに至つてソレニユエニと海水と波浪とに喩へて示さる畢竟この心が海水あればこの身は波浪のやうなものである、水はもと不動なるものであるけれども風のために動くときは波をひき起し水のときは丸で違ふやうなれども元來水を離れて外には二點の波といふものはあく又山の如き大波もその儘か水であればその波の外には一滴の水といふものはないされば水と波とはその形に於てこそ違つてあるやうに見ゆるなれその實體は決して別物ではない但動くときと靜かなるときによつて水と波との相違が出来るのみであるから靜にして水であらうとも動て波とならうとも

うの實體に於てい毫も異なることはない吾々の身心もその通で心はもとより不動にして澄み湛えたる水の如きものなれども前に述べた十二因縁といふやうな種々な縁に觸れると動く動くといふと前に述べた諸種の職といふものが分れる諸職が分れると四大が出来てそれが結合してつるに身體が出来るのである、それは不動の水が風といふ縁に觸れて大波小波をひき起すやうなものじや、サスレば生れて來るといふも死で去くといふも形相はかはれど實際の少しも違ふたことはない又前に述べた四大五蘊といふものが始終遷流造作して出来て居るこの身も死ねば土と成り焼けば灰となるといふ者の實際は少しも壊滅するのではないじや、佛が常に生死は夢幻の如くじや、四大五蘊のこの身は敗壞するものじやと云はれたるのは凡夫が妄分別を以て出生入死と始終うつりゆくこの身を認めて執着するからのことであるケレドモ上に示された如く悟てみる

ば生れかほり死かほりゆくものを離れて別に實體はなく四大五蘊のこの身を除いて外に敗壞せぬ眞性といふものはないから故云。死去來。眞。實。人。四。大。五。蘊。不。壞。身。といはれたのである。

今坐禪者正入佛性海即標諸佛體本有妙淨明心頓現前
本來一段光明終圓照海水都無增減波浪亦無退轉

吾人は本來具足箇々圓成で有つて朝より暮に至るまで決して諸佛と別人ではない筈であるけれども佛祖單傳の儀式に依て坐禪をする時は乃ち佛陀の性海に入ることが出来る性海といふは海といふものは八種の徳を具へて居るといふことで經文の中に佛性に譬へてあり且つ又前にも心如海水なほ有つたゆゑに今の縁をも承けてこゝに用ひられたる今は坐禪を修するときは吾人の心性がどうも直さず諸佛の性と契合して無二無別となるツコを正入佛性海と

いふ吾人の心性既に佛性と相合し又その形相も諸佛の儀式に依て坐禪することであればその體が諸佛の體相を標して居るわけじやかくのごとく身は諸佛の體相をあらはさ心は毫も邪念を起さずして佛性の大海に歸入した上は本來具有ある妙淨明の心が忽ちに現はれてくる妙淨明といふは吾人の心性はもとより一個の物體のあらぬのではなく又物體でないから欲垢煩惱といふやうなものに染み汚さるゝこともなく一切のものを照見するの徳を具へてゐるから淨明といふそのところは實に筆にも言葉にもあらはすことの出来ぬところではあく我れと自身にも測ることが出来ぬほきであるから妙の字を冠らせて妙淨明といふのじや併しこの微妙の性は坐禪して始めて出来るのではなくて本來具へて居るのがこの時に見はれてくるのであるから本有と云ひ頓現前といはれた現前は現出と同様にてアラハルといふほどの意味であるこの妙淨明の心が現は

れてくると其の光明蓋天蓋地で十方世界を照しぬいて恰も日月の照さるものなきが如くである。終圓照の終は終天を造り熟する字でイツマデモといふほどの意圖は偏の反にて残る限なく照すの意味で圓照といふたのじや、一たび各自本來具有の妙心開發したる時はろの光明十方を照破して殘すところなく且つろの光明は永久に滅することはい、この時に至れば眼で色を見耳で聲を聞く等すべの前境に對して彼我が隔あければもとより罣碍らるゝことなく古今を絶し凡聖を超え盡天盡地自己の光明一枚となる恰も海水に増減なく波浪に退轉なきが如くじや。

是以諸佛爲一大事因緣出現於世直令衆生開示悟入佛之知見。

是以は前を承ける辭坐禪は前に云つた如き功德があるソコでいふ

ほどの意三世の諸佛が此の世に出現せらるゝのは外の事でない一大事因緣の爲めである。一大事因緣といふは前に述べた各自本來具有の妙心を悟るのじや、一切衆生といふて生けとし生ける者は本來諸佛と同様ある智慧も徳も具へて居るがら吾れと自ら妄想執着を起してその智徳を味まし自知することの出来ないから益々迷を重ね暗きより暗きに陥るのを諸佛は不惑に思召して其迷を除いて衆生をして自ら諸佛と同等なる正知見を開かしめ成程自分は從來曾て諸佛に劣らぬ智徳を具へて居たのであると合點せしめんと悲愍より此の世に出現せられるのじや、これは法華經の文句で有て直といふ字が最も眼を着くべき字である何故といふに三世の諸佛が出現有て百千無量の法門を説かるゝも外の目的ではない只この佛知見を開かせたいばかりの爲めであるソレ故に諸佛の方より云へは固より種々の方便法門を用ひす慈直にこの知見を開かせたいと

いふに過ぎない能く意を注げて看よ。

而有寂靜無漏妙術。是謂坐禪。即是諸佛自受用三昧。又謂三昧王三昧。若一時安住此三昧。則直開明心地。良知佛道正門也。

ソコデラの佛知見を直に開くことの出来る捷路といふは茲に寂靜無漏の妙術がある。是を坐禪といふ。寂靜はモノシヅカと訓して一切の騒鬧しきことを離るる義。無漏はモル、コトナシと讀て有漏の反對。有漏は妄想煩惱の未だ全く盡きずして時々漏れ出づるの義なるが無漏はるの反對。有て一切の妄想煩惱を銷磨し盡くして毫も殘るところなきの義。サレバ如何にして騒鬧を離れ妄想を銷すといふに吾れ自らの身心は本來無物に去て一點の塵垢を受けず。活脱自在であるといふことをシカと自知するのである。而してこの妙術は即ち

諸佛の自受用三昧とや。自受用と他受用といふことあり。他受用は他の意に隨て事を爲すこと。自受用は己の意に任せて事を爲すこと。三昧は前に釋してあつたか。此處ては行法とでもいふは。義で諸佛自受用三昧の七字で諸佛の自ら行ふところの行法といふ意である。王三昧とは此の坐禪は諸三昧の中で一番貴くして一切の三昧は悉く此の中に攝せずといふことなしとの意より三昧王三昧といふ。此の坐禪はかくのごとく最尊無比の法門なれば。若し一時間たりとも眞正にこの坐禪を修し安住不動如須彌山といふが如き境界に至ることが出来たならば。直に自己の本心を悟ることか出来る。自己の心地が悟れたなら。諸佛の萬行一として通ぜすといふことあしといふに至るシテ見れば。八萬四千の法門など、云つて佛道に入るに種々の門口があるけれども。ソレは皆權門と云つて裏門とか假門とかいふやうなもので。正門即ち表玄關ともいふべきは。只この坐禪の一門より

外にないといふこととの合點がゆかねばならぬじや。

其欲開明心地者。放捨雜知雜解。拋下世法佛法。斷絕一切妄情。現成一實真心。迷雲收晴。心月新明。

サテ自己の心地を開明せんとするものは先づ種々難多なる慮知見解をうち捨て世俗の事は更なり佛法をも抛げすてあらゆる妄分別を絶ちきりて只一の眞實心のみを存してゆけば從來の迷の雲霧ははれわたりて眞如の月が新に光明を放ち中秋満月の如き境界に至る。全体各自の心地は本來玲瓏明白なれども唯難知解の爲めに蔽はれ是れハ世法じや彼れば佛法じやと種々な妄分別を起して執着するるのであるが元より世法とが佛法とかいふ區別もドレが俗じやドレが眞じやといふ分界もなく又妄情とか眞心とかいへども本來の實体はないものであるけれども今は暫く初心の者の爲めに喩を

以て雲の晴れて月が明かになるやうなものじやと云はれたまで、有て眞箇に悟つて見れば雲といふものも月といふものもさいのである文字にとりついて二物あると思ふてはならぬ。

佛言聞思猶如處門外。坐禪正還家穩坐。誠哉。若夫聞思諸見末休。心地尙滯。故如處門外。只箇坐禪。一切休歇。無處不通。故似還家穩坐。

これは佛語を引て坐禪の肝要なることを證據立てらるゝ人の説を聞て又經論等に依て種々の説を知るは皆これを聞といふ、その説を自分て考へるを思といふが聞たり思ふたりする間はまた餘所の門外に立て處る日雇とりのやうなもので有て自由安樂の境界を得ることとは出來ぬが坐禪は直に自分の家に還て安穩に坐つたやうなもので誰れに憚るところもかく家の内の物は思ふ儘に使ふことが出來

何一つとして意の如くならぬといふことなき無事安樂の境界である。佛の仰せられたは實に偽なき言であるとして誠哉と云はれた。若夫より以下は國師が佛語に注釋をつけられたのじや、夫の聞思のところでア一であらうコ一であらうと種々な分別知解を運らして居て未だ決定せず隨て自己の心地も未だ明了に悟ることが出來ず心の内は常にアクセクとして休まるときなきゆゑに恰も門外に居るやうなものじやがられにひきかへて此の坐禪を修するときは一切の雜念妄情を休歇とヤメテ世法佛法共にうち捨て心内湛寂なるおゆゑに大道に入て八面玲瓏十方通暢處として通達せざるることなき無碍自在の境界に至るから還家穩坐のやうなものであるといはれた。

而五蓋煩惱皆從無明起。無明者不明己也。坐禪者是明己

也。縱雖斷五蓋未斷無明非是佛祖。

五蓋は貪瞋癡睡眠掉悔を云ふ。貪は貪欲と續く字で猥りに物をムサボルこと、瞋は瞋恚と續いて怒り腹立つこと、癡は愚癡と續いて物の辨別がつかぬこと、睡眠は分つて居る掉悔はクヤムこと、この五つは人々の淨明なる本心を蓋ひ味ますものである。蓋といふ。煩惱は口癖によく云ふことなるが多くの人は煩惱の犬に驅られ又は子煩惱をどと云つて色欲愛欲に溺れたることのみを云ふやうに心得て居るがサウでない煩はワツラハス惱はナヤマスと讀み心を惱亂させる義で佛教では八萬四千の煩惱があると説く。この五蓋はろの中の五つであるが其の本をいへば五つ共に皆無明といふより起るのじや、無明は不覺とも云つて教相家扱ては根本無明始末無明又は三無明といふがある。杯と種々微細に解釋することであるが國

師は只無明は己を明めざるなりと釋せられた己を明めざるといふは自己本來具有の妙徳を悟らぬことじや然るに坐禪はるの本具の妙徳を悟る秘術であるから肝要である五蓋は本心を蓋ひ味ますところの煩惱であるから是非とも斷じ盡さねばならぬことは云ふまでもないが、縦ひ五蓋を斷し盡すとも五蓋の由て起るところの根本なる無明蓋といふを斷せざる時は佛陀や祖師の境界に至ること出来ぬ、根本の無明さへ除くことが出来れば五蓋は自然になくなる丁度獸の皮を剥ぎとれば皮に生て居る毛は自然にとれるやうなものであるから坐禪は是非とも修めねばなるまい。

若欲斷無明坐禪辨道最是秘訣也。

こゝは前を承けて述へられたものであるから別段委しく釋することもない、前に云つた無明を除き捨つるには坐禪辨道か最上の秘傳とも口訣ともいふべきじや、この外には決して妙術はない。

古人云。妄息寂生。寂生智現。智現真見。

凡夫か自己の眞性を徹見することが出来ぬといふは常に妄想分別の爲めに心内を動亂せられて居るからである、妄想分別とて色欲や愛欲や財欲やなどばかりではない是れが善じや彼れが悪じや迷じや悟じや眞じや偽じやといふやうな分別は悉く妄想じや、此の妄想かスツカリ起らぬやうになれば心内が寂靜になる是を妄息寂生といふ、心内が寂靜になれば自己の本智が顯れる、此智といふは世間での智識とか智慧とかいふ所謂智情意の智ではある智識とかいふものは妄想であるからそれではない即ち般若の大智と云つて智愚利鈍迷悟凡聖の論量を絶したる妙智を指して云ふのじや、此妙智が現はれて來れば本具の眞性が現れる之を佛性とも謂ふ併し妄想と眞

性とドレホド違ふて居るものか眞も妄も別な物があると思ふて一
を捨て、一を取らうとすまい。

若欲盡妄心。須休善惡思。又須一切緣務。都來放捨。心無思
身無事。是第一用心也。

前に述べた妄想を斷ち盡さんとするには、此れは善、彼れは惡じやと
いふ取捨憎愛の分別を休め、又その他の作務を一切うち捨て、心に何
事を思ふことなく、身にも何事をせぬやうにせねばならぬ、この無念
無作が坐禪を爲すに第一の用心じや。近時の禪を修むる者は、往々
この用心をなさず、却て種々な妄想見解を逞ふして、活達じやと心得
て居るが大なる謬である。

妄緣盡時。妄心隨滅。妄心若滅。不變體現。了了常知。非寂滅。

法。非動作法。

こゝは前をくりかへして説くのだじや。妄緣とは妄心妄念を引き起
す緣となる總べての事柄、その妄心を起す緣が盡くる時は、妄心も相
續して起らぬから、自然になくなる、妄心がなくなれば、不變不異なる
眞性の實體があらはれる。眞性があらはれた時は、一切の事柄に對し
て、少しも妄分別にわたらず了了とアキラカにその物を事のまゝに知
れる、事物がそのまゝに知れるといふは、外ではない、例へば柳は緑に
花は紅と見るは、誰も違ふたことではないが、眞性の現れたときは、只そ
の間に取捨憎愛を起さず、緣は綠、紅は紅とみるまでのことである、こ
の時に至れば、此方の心と前境と共に動作に涉らず、又寂滅に沈まず
心と境との待對を絶して、自由の働をなすことができる。

然所有技藝術道醫方占相皆當遠離。況乎歌舞妓樂誼諍戲論名相利養。悉不可近之。頌詩歌詠之類。自雖爲淨心因緣。而莫好營文章筆硯。擲下不用。是道者之勝鬪也。是調心之至要也。美服與垢衣俱不可着用。美服者生貪。又有盜賊畏。故爲道者障難。若有因緣。若有入施與而不受者。古來嘉蹤也。縱本有之。又不照管。盜賊劫奪。不可追尋。恡惜也。垢衣舊衣者。浣洗補治。去垢膩。令淨潔。而可著用之。不去垢膩。身冷病發。又爲障道因緣也。雖然。不管身命。衣不足。食不足。睡眠不足。是名三不足。皆退墮因緣也。一切生物堅物。乃至損物。不淨食。皆不可食之。腹中鳴動。身心熱惱。打坐有煩。一切美食。不可耽著。非但身心有煩。貪念所未免也。食祇取支氣。不

可嗜味。或飽食打坐。發病因緣也。大小食後。不得輒坐。暫經少時。乃堪可坐。凡比丘僧必可節量食。節量食者。謂涯分也。三分中。食二分。餘一分。一切風藥。胡麻。薯蕷等。常可服之。是調身之要術也。

上の「若欲盡妄心」より前段に至るまでは坐禪用心の總体を示したものであるが、此處はその細目を示された即ち妄縁とあるべき事柄を擧げられた。この細目は僧に關する事が多いやうに見える。諸種の技藝術道は才を銜ひ名を釣るやうになり、醫方といふは醫術及び藥劑を調合すること占はウラナヒ相は人相家相等を見ること、これらは心を勞し利を食るやうになる。尤も諸種の技藝醫方等は世間に有益なる事なれども坐禪辨道には妨どある。歌舞技藝等は人の心を樂ましむるの効はあるけれども、心念を散亂せしむるものなり。諍諍は

カマビスシク、アラソフと讀で誼譚口論のこと、戲論は茶番狂言道化口合等の人の笑を催ふ滑稽じみたること、その他名譽利欲に流るること等はすべて悉く學道の障となるをもて遠かつて近かぬやうにせねばならぬ、又頌といふて人の徳を譽める詩及尋常の詩歌、詠は歌のこと、詩歌の類の隨分心を清淨にするに都合よきこともあるけれども動もすれば利名の媒となるに依て時々心に浮び出でたる儘に之を作るはわるくはないけれども自ら嗜み好んでつくつてはならぬ、尤も佛門にて諸佛を讚歎し法會を莊嚴する爲めあはれども專心に參禪する詠を用ひ華を散らし香を焼くなどの事もあれども專心に參禪するには妨となる、文章筆硯とは筆硯をとりて巧みに文章を綴ること、巧みに文章などを作らんとすれば多く精魂を費し又人の心をも蕩かすものであるから一切擲下て用ひぬやうにすべし、これらは總べて心を散亂し妄念を引くの媒となるものゆゑに一切せぬこと、道者之

勝鬪の勝鬪とはスグレタル、アトカタと讀でよき手本といふ意、關心之至要とは心を散亂せぬやうに調ふるに肝要な事といふ意、斯く總べての事を擲ち捨てるのが古來有道者の履み行かれたよき手本であり又實際に心を攝めてゆくに一番の肝要のことであるから能く心注げねばならぬ。これまでは心を調ふる上に就ての誠である、これより以下は身を調ふる上に就ての誠じや。先づ衣服のことに就て云へば、美服と垢ついた服はどちらも俱に着てはならぬ。何故といふに、美服を着用すると兎角に貪欲を起し易いものであり、又盜賊の爲めにつけねらはれて危難に出逢ふやうなことがあるから辨道修行をする者の妨となる、ソレデあるから若し因縁があつて人か施し與へるやうな事があつてもその施しを受けないのが古人の手本である、嘉蹟は勝鬪と同意なり。縦ひ本から所持して居ても照管として常に心にかけることをしてはならぬ、たとひ盜賊の爲めに

奪ひ取らるゝとも後を追ふて探索し、また後々までも憊みをかけてはならぬ。又垢ついた服や着古した服はよく洗濯をし破れ綻びなどを綴補つて垢や膩を洗ひ落して奇麗サツパリとして着るがよい垢や膩を落さずに穢ないまゝで着れば身躰が冷て病氣が起る。病氣にかゝつては辨道修行することが出来ぬから、これも障道の因縁じや。參禪辨道する者は固より身命をも抛つて居るからかまはないやうな者であれども、衣物と食物と睡の足らないのは三不足といつていづれも修行を墮るやうになるものであるから、過不及に陥らぬやうに適度を計らねばならぬ。サテ食物に就ては、煮焼をせぬ生物、堅い物、身體を損ふ物、及び不潔物等はすへて腸胃をうるこなうから一切よろしくさい、損物といふ多く酸味を食すれば脾を損し、苦味を食すれば肺を損し、甘味を食すれば腎を損し、辛味を食すれば肝を損し、鹹味を食すれば心を損する等の類である、總して食物は適度

といふことか肝要てから、多すぎるのも、少なすぎるのも、どちらも身體を損ふものである、上にあげたやうな物を食すれば腹中が鳴り熱發を催ふして苦惱を覺ゆるやうになるから、これまた坐禪のさまたげとなる。さればとて、美食に耽てもよろしくない、美食に耽て多量に食すれば身躰を損ふのみではなく、貪欲の念を生ずるものであるから、これまた辨道のさわりとなる。全体食物は命をつなぐために用うるものであるから、只命をさへへてゆきさへすればそれでよしとして、これの滋味あれば厚甘味じやどろの味に耽てはならぬ。又飽食して坐禪すれば病氣を發すから、これもよろしくない。すべて食後直に坐るのはよろしくないから、暫く時を経てから坐禪をするのよい。すべて比丘僧といふものは食物のほどを量て用ゆるものである、比丘は梵語であつて、破惡、怖魔、乞士など種々の譯があるが、ツマリ僧のことと見てよい。節量食といふは名々の身躰の大小強弱等

に依てるの分に相應するだけの量を定めて用ゆることである。その分量を定めて食するに先づ全肺の分量を三分にまてるの中の二分を食して一分だけは食はずに置くやうにする。例へは一度の食量を一合二夕とすれば八夕だけを食して四夕は食はずに置くやうにするのであるが、かやうにしてゆけば決して身體を損ふやうなことではない。又すべての風樂は邪氣を拂ひ、胡麻、薯蕷の類は滋養になるものであるから始終用ひて身體の衰弱せぬやうにするがよい。これら即ち身體を調ふる要術じや。

凡坐禪時不可靠倚牆壁禪椅及屏障等。又莫當風烈處而打坐。莫登高顯處而打坐。皆發病因緣也。

こゝは坐禪をする場處に就ての訓誡じや。靠倚はモタレ、ヨリカ、ルといふこと、凡べて坐禪をするときに牆壁、坐禪に用ゆる椅子、又屏

風障子などの類にヨリカ、リ、モタレカ、ツテ坐するのはよくない。これは身體がダルクなつて遂に睡を催し志もナマケル、又風の烈しく吹く處にて坐するのも身體の害にある、又高臺にて四方を見透すところは氣が散てよろしくない。すべてこれらの處はみな病氣を發す因緣となるから坐禪するにはよろしくない。閑靜にして心の散亂せぬやうなところを擇んで坐するのがよい。

若坐禪時身或如熱或如寒或如滑或如堅或如柔或如重或如輕或如驚覺皆息不調必可調之。調息之法暫開張口。長息則任長。短息任短。漸漸調之。稍稍隨之。覺觸來時自然調適而後鼻息可任通而通也。

こゝは坐禪中の發病を説いて、氣息を調ふるの法を示すのである。若し坐禪をして居る間に或は身體が熱くなり、或は寒くなり、或は澁

り、或は滑、或い堅くなり、或は柔、或は重く、或は軽く、或は驚覺するやうなことがあるのは、これはみち息氣の調はないところより起るのであるから心得て居てかやうなことのあつた時は必ず氣息を調へるがよい。サテその調息の法といふは先づ初めに暫くの間口を開き張て内より氣を吐き出して息をする、その息が長ければ長いなりに任せ、短ければ短いなりにまかせて少しもことさらに之をためさず、息の通するまゝにして漸次に調へてゆけば息が續てゆくうちに身體が安かになつてくるに隨て自然に調ふて速からず遅からず丁度はどわひになつてくる、そうしたところで鼻息は通するにまかせてゆくなり。

心若或如沈、或如浮、或如騰、或如利、或室外通見、或身中通見、或見佛身、或見菩薩、或起知見、或通利經論、如是等種種、

奇特種種異相、悉是念息不調之病也。若有病時、安心於兩趺上而坐、心若昏沈時、安心於髮際眉間、心若散亂時、安心於鼻端丹田、居常坐時、安心於左掌中、若坐久時、雖不必安心、心自不散亂也。

前段にては息の調はざるより發るところの禪病と、調息の法を示されたのであるが、こゝは心念の不調より發る病を示して、その治法を説かれるのである。坐禪の中に心が沈み込み、或は浮ひ出て、又は心か朦朧となり、又は心か急に銳利になり、又坐禪をして居る室の外か判然と透つて見えたり、又自分の身體の中が見えたり、又佛菩薩の姿が見えたり、或は急に悟たやうな感覺が起り、或は俄にこれまで解せなかつた經論が解せたりすることかあるが、かやうな奇異不思議はみな心念が定まらぬところより發る、敎家では唯識所變と云ふが、

まり妄念の影坊子であつて矢張禪病である。かやうな事はよく心得て居ないといふととヨツトするとかやうなことを悟じやと誤るやうな事とかである。猶ほ禪病の委いことは『禪秘要法經』『治禪病要經』の中に説てあり又『楞嚴經』にも五十種の禪魔のことが説てあるから見て置くがよい。サチ若しこのやうな病が發たときはせうするがよいと云ふに先づ組み合せたる兩趺の上に心を置いて坐るのである。心は無相であるから趺の上に置きやうはないやうなものであるけれども只置た氣になつて坐るのじや。若し昏沈の病と云つて心か沈み込んで昏くなるやうな時は心を髮の生い際又は眉間に置き又散亂の病と云ふて心猿飛び移る五欲の枝といふやうに心が散亂して鎖つかぬ時には心を鼻端又は丹田と云つて臍より二寸ばかり下の處に置くがよい。平常別に變なことのなきときは心を左の掌の中に置いて坐するがよい。かくして久しい間坐て居れば

殊更に何處に心を安くといふとをなさずとも自ら散亂せぬやうになる。全体明眼の宗師家に隨侍して居ても禪病は發り易いものであるからまして宗師家に隨侍せずして只佛經祖錄等を拜讀し又時々垂誨を受け提唱を聽いて坐禪せやうと思ふ人々に於ては猶更あり勝ちならんと思ふそれらの人々の爲めにとて特にこの用心記を講する次第であるから文章も複雑して居り活氣も乏しく面白くないけれどもこの邊は能く心を注けて置くがよい。

復如古教。雖照心家訓。不可多見之。書之聞之。多則皆亂心之因緣也。凡疲勞身心。悉發病因緣也。火難。水難。風難。賊難。及與海邊。酒肆。姪房寡女。處女。妓樂之邊。並莫打坐。國王。大臣。權勢家。多欲。名聞。戲論人。亦不得近住之。大佛事。大造營。最雖爲善事。專坐禪人。不可修之。不得好說法教化。散心亂。

念從是而起。不得好樂多衆。貪求弟子。不得多行多學。極明。極暗。極寒。極熱。乃至遊人。戲女處。並莫打坐。

この一段も特に僧侶に關する事が多いやうに見える。サテまた『禪苑清規』『永平清規』等にも古教照心すべしとあつて、古人の教訓は自分の心を照らして研究するのは禪門の家訓ではあるけれども、これも多分に之を讀み又之を寫し或之を聞くのは却つて心か散亂する因縁とあるからよろしくない。すべて過分に身を使ひ心を勞するのは何事に限らず皆病氣の發る基であるから適度を量つてゆかねばならぬ。水難、火難、風難、賊難の近處、及び海邊、酒肆、淫房、寡女、處女、妓樂等の近處は何れも心を惑し氣を狂しむるものであるからかやうのところにては決して打坐してはならぬ、これも大抵云はずと知れて居る。國王、大臣、權勢家として權威勢力のあるところ、多欲の人、名譽

を好む人、戲論の人、戲論のことは上にあつた如くじや、これらもすべて心念を動亂し辨道の妨とあるからその近邊に住居するのはよろしくない。國王大臣等の佛法を保護する人々であるから之を尊ぶはよろしいけれども、これに近づき親しむ時は自然に學道の妨げとなる、それ故に懶瓚禪師と云ふは天子から請待の勅使に對して甚の閑工夫あつてか俗人の爲に涕を拭ふことをなさんやと云はれた、うの他古今の高僧達には天子王侯より禮を厚うして請待せられても赴かなかつた人も多い、まして專一に參禪しようと思つて志す者はつとめて避けねはならぬ。大佛事は多くの僧俗を集めて賑かな供養法會等をする、大造營とは廣大なる堂塔伽藍等を建立するやうなこと、これらは佛法を盛ならしむること、最も美事に相違ないが多くの金錢を取扱ひ多くの人を使ひ、自分も人も心身を勞することであるから專一に坐禪をする人はかやうなをしてはならぬ。說法教化

は僧の本分あれど、これも辨道中は自から好でなすのはよくない又好んで多くの人を集め、弟子をもを求めることなどもみな心を散亂する、又みだりに諸方に行脚して遊山、甃水を事とし、多聞博識をもとむるは徒らに光陰を費し、辨道を妨げるからよろしくない、又極明い處と極暗い處は心念不調の縁となり、又極寒極熱の處は共に身體不調の縁となる。其の他遊人、戲女の處などはすべて坐禪する場所柄でないからよく慎まねばならぬ。

叢林之中。善知識處。深山幽谷。可依止之。緣水青山。是經行之處。谿邊樹下。是澄心之處也。觀無常。不可忘。是勵探道心也。

前段は坐禪に宜くないことを擧げて諷められたが、こゝは坐禪に宜い場處を示されるのである。叢林は坐禪辨道する人の多く集つ

て居る處、禪林、選佛場と云ふと同様である。善知識に三種あるが今は教授の善知識と云ふので教導訓誡をしてくれる師家のこと。深山幽谷は遠く世塵を離れて居て心念の散亂する心配がないから禪者の住むには剛強の場處じやられ故古來より叢林は大抵深山幽谷の間に設けてある、深山幽谷でも初心の者は獨身は宜しくない、叢林には必ず師家がおり且つ同學共に切磋するの効があるから坐禪は叢林に限る。經行はキンヒンと讀み來て居るが打坐の間にする散歩のこと、是れは緣水青山の間、谿邊樹下の心念を澄すによいから適當である、ううして世の無常なることを忘れずに始終觀念せねばならぬ。世の無常を觀念すると自ら辨道の志を勵ますわけじや、人生は朝露の如く頼み難いものであると云ふ、感念が常に心頭に在れば暫時も間斷なく工夫をせずには居られぬわけであるからこの觀念は最も肝要じや。

坐褥須厚敷。打坐安樂也。道場須清潔。而常燒香。獻華。則護法善神。及佛菩薩。影向守護也。若安置於佛菩薩。及羅漢像。一切惡魔鬼魅。不得其便也。

こゝは坐禪する人の儀式を示されるのである。坐褥は坐禪をするときに臂の下に敷く物、この敷物はなるべく厚くして置かないと臂が痛み自然に怠惰を生ずるやうにあるから須く厚く敷くべしである。この坐褥を厚く敷いて坐すれば左様の苦痛を感ずることがなくて安樂である。道場は坐禪をする場所、居所が不潔であつては自然と病氣などの患があるばかりでなく、心も自然にサツパリとせぬものであるから坐禪の場所はつとめて掃除などを怠らぬやうにして常に清潔にして置くがよい。その上に清浄なる香華をささげるときは自分の心も自ら正肅になり坐相も自ら正しくなるばかりでな

く護法善神と云つて佛法を守護する神々や諸佛諸菩薩方が吾々の目に見えぬとも影になつて坐禪する人を守護してくださる。若し又坐禪の道場の内に佛菩薩羅漢方の像を安置しておくときは一切の悪魔鬼神等が坐禪の人を妨害しやうとしてもその像の威徳に畏れて道場に入ることができぬから邪魔のつけ入るスキがない。邪魔悪鬼の類は正法を行ふ人かあれば己が領分が狭くなつて恣に悪事を働くことができぬに依て坐禪修行なせする者があればすきを窺て居てるのを害しようとかうつて居ると云ふことであるからそのやうな邪魔につけ入れられぬやうに用心することが肝要じや。

常住大慈大悲。坐禪無量功德。回向一切衆生。莫生憍慢。我慢。法慢。此是外道凡夫法也。念誓斷煩惱。誓證菩提。只打坐。一切不爲。是參禪要術也。

こゝは坐禪をする人の心得を示さる。この心得方は佛祖直傳の坐
 禪を行ふ人には是非ともなくなつて叶はぬもので、若しこの心得がな
 いときは佛祖の坐禪とは云われぬと申すはであるから尤もよく生
 意すべきところじや。サアその心得といふは平生に大慈大悲の慈
 に住することじや、人に樂を興へるを慈と云ひ、人の苦しみを救ふて
 やるを悲と云ふが、坐禪をするに暫時もこの慈悲の念を忘れぬやう
 にして、坐禪を行ふ上より生ずる一切の功德をば己が身につけよう
 とはせずして、殘らず一切衆生と云ふて自分より外の人間は申すに
 及ばずありとあらゆる生ある者に回向するのやうな回向といふは
 亡に對して讀經などするに過ぎぬが、此の功德を以て
 字で書つて自分で積む功德をメグシテ人に與へてやることを
 普く一切衆生に及ぼし、我等衆生と共々に佛道を成ぜんことをいふ

四句の偈文を唱へて始めて回向といふことにある、こゝは自分で坐
 禪をしてゐるの功德を自分の身に受けずにソツクリそのまゝ殘らず
 一切衆生の方へ向けて興へるのであるが、この回向といふとは常に
 大慈大悲の念に住して居る上からであつてはいかぬ。憍慢の總て
 自ら高ぶる人を輕蔑すること、我慢は是非の上に於て自分を是とし
 人を非とすること、法慢は自分が修行したとか悟たとか云ふてそれ
 を鼻にかけて人をさげしむことであるが、かやうな慢心を起しては
 ならぬ、かやうな慢心があつては外道凡夫の法と申すものじや、外道
 といふは心外に法を求むる宗派で有て釋尊が印度に出現の時に九
 十六種の外道が有たと申すとじや、凡夫は愚癡迷蒙にして生死に流
 轉するもの、總稱である外道も凡夫も皆共に坐禪をするのである
 か外道禪、凡夫禪はいづれもこの慢心があるから佛祖の坐禪とは同
 様でない。故に佛祖の坐禪を學ぶ者は能く心をつけてかやうな慢

心を起さぬやうにせねばならぬ。又煩惱はあらんかぎり残らす断ちつくしてしまい、菩提はどこでも悟らんと誓願を立て常に忘れぬやうにしてゆかねばならぬ。菩提は梵語で有つて翻譯すれば佛道といふこと、かく誓願を立てゝ暫時も忘るゝことなく一心不亂に坐禪を修し一切世間の事とせず、工夫辨道するのが參禪の要術である。

常可濯目洗足。身心閑靜。威儀齊整。應捨世情。莫執道情。

目を濯ふは睡を醒ます爲め、足を洗ふは退屈の念、懈怠の念を去る爲めである。坐禪をして居ると動もすれば睡を催らし、退屈を生ずるものであるから時々つとめて目を洗ひ足を洗ふて身心を爽かにするかよい、洗足のことば印度のやうな暑熱のつよい國ではとりわけて行ふものと見えて經文の中に「洗足已敷座而坐」といふ語が處々に

ある。かく睡眠、懈怠の起らぬやうにして身も心も閑靜とモノシツカにし、威儀ナリフリを整ひて、世情をサツパリとうち捨てる世情といふ世間名利にかゝるすべての情念であるその情念を打ち捨ねば身心閑靜といふわけにゆかね。世情を捨てるばかりでなく、道情と云ふて世間名利にかゝはらぬ佛道の情念でも執着してはよくないから是れも共にうち捨てねばならぬ。世情を捨てるといふことは別に不思議もあいことであるが道情までも捨てねばならぬといふは些し合點のゆきかぬるか知らぬが、佛法に於ては何事によらず總して執着といふことを忌むので例へば世俗の事をスツカリとうち捨てゝ一心に坐禪をして居るのはア、よい心地である、この味は忘れられぬ悟といふものは結構なものである、これほどよいものはないと執着をすれば又一つの病で有つて眞正の坐禪に契はないのであるから世情道情共にうちすてねばならぬ。

法雖不可慳然不請莫說守三請從四實十欲言九休去口
邊生醜如臘月扇如風鈴懸虛空不問四方風是道人風標
也。只以法而不貪於人以道而不貢於己便是第一用心也。

こゝは修禪者が人の爲めに説法することの上に就て訓誡せらる。
如來も『梵網經』といふ經文の中に不慳法財戒といふを説かせられて
ある位であるから自分の知て居る法を慳んで人の爲めに説き聞か
せないのはよろしくないけれども、人の頼みもせぬに自分より強賣
に説法するときは法の威徳を損するばかりでその効がない、それゆ
ゑに法は慳むべからずと雖も然も請はされば説くこと莫れと誠
められた、まして坐禪辨道中は成るべく心念の純一無雜なるのがよ
いので、あるところが猥りに人の爲めに説法化教をなすときは却て
心念の散亂を來すやうなことになるからかたくなに以て慎むべし。

三。請といふは三度説法を請願すること、聽者より三度も請願した
上で始めて説法をするといふ佛祖の掟である。これは何にも見識
を構へて自ら高ぶるといふわけではあらず、その位にせねば説くこと
ろの法も軽々しくなり、聽く者も眞正の信心がないから折角の説法
も戲論に流れてしまふに由て、かやうに掟を立てられたものである
が、兎に角この三請の掟を守ていよく説法する場合に臨ては四實
に従ふべきじや。四實は示、教、利、喜である。示は説示の義で例へば
善惡報應、因果修證等の道理を説き示すこと、教は教訓の義で惡を捨
て善を行ひ、道心を發さしむ等のこと、利は利益の義で日用着衣喫飯
の上に於ても事に觸れ機に臨んでその人を説き諭して初心晩學を
利益すること、喜は隨喜の義で初學の行を讚歎して益々進ましむ等
のこと、人の爲めに説法するに只言語を以てするのみでなく、この四
つが備はらなくては眞實の説法といふは云はれぬから、この掟に従ふべ

さじや。且つまた説法するに付ても深く慎て縦ひ一言半句を説くにも十たび言はん。として九たびも見合せるやうにして決して無用の語を云はぬこと、かやうにせねば折角説ても無益に歸するわけじやから、あるべくは口の邊に醜のはえるやうにし、十二月の寒い時の扇子の如くにしてゆくがよい口の邊に醜がはえると云ふは口をキカヌこと、臘月の扇子は有つても用が赤いツマリ口を用ひず自分よりつめて口をさかぬことであるが、サテ人の請に應し口を開いて説法するときは丁度檐端に懸つてある風鈴か東西南北四方の風がどちらから吹いて來てもその吹いて來た方角にかまはず東風でも南風でも一向頓着なく同じやうに鳴るが如く少しも揀擇なく同等にとりあつかひ只問ふがまに——答ふるがよい、風鈴の譬は天童如淨禪師の風鈴頌に「渾身是口掛虚空、不管東西南北風、一等爲渠談般若、滴丁東了滴東丁」とあるに據られた者と見える。掛虚空といふ

は檐端に懸つて居るところを見立て、いふたのじや。檐端に懸つて居る風鈴は自分で鳴りはせぬ必ず風が吹くに由て鳴る又吹く風にも東西南北の隔別をせずして同様に鳴るものであるが、佛法では無我相、無人相、無衆生相、無壽者相と云ふことが有つて、説く人も聽く人との對待を見ず恰も風鈴の風に隨つて鳴る如く無相の説法をなすのが道人たる者の風儀じや。かりゆめにも自分の説法を多くの人に聞かせたいとか、強ひて人に信仰させたいといふやうな貪欲の念、又は自分は佛道を得て居るといふ顔付をして人に誇り貢ぶるやうな高慢の心を起してはならぬ、これ第一の用心である。

夫坐禪者。非于教行證。而兼此三德。謂證者。以待悟爲則。不是坐禪心行者。以眞履實踐。不是坐禪心教者。以斷惡修善。不是坐禪心禪中縱立教。而非居常教。謂直指單傳道。舉體

全說話語本沒章句意盡理窮處一言盡十方絲毫未舉揚
 是豈不佛祖真正之教乎或雖談行又無爲行謂身無所作
 口無密誦心無尋思六根自清淨一切不染汚非聲聞十六
 行非緣覺十二行非菩薩六度萬行一切不爲故名爲佛只
 安往諸佛自受用三昧游戲菩薩四安樂行是豈不佛祖探
 妙之行乎或雖說證無證而證是三昧王三昧無生智發現
 三昧一切智發現三昧自然智發現三昧如來智慧開發明
 門大安樂行法門所發超聖凡格式出迷悟情量是豈不本
 有大覺之證乎。

坐禪の用心も卑より高淺より深と段々に進みゆきこゝに至て全く
 ろの頂上に達し海底に徹したるやうなわけで頗る高尚深遠なる説

である全体佛教では教行證の三法といふものが有つて大乘でも小
 乗でも皆この三を守つてゆくことである然るに今祖師門下ではこ
 の三法に拘はらないといふことを示さる。なせといふに小乗でも
 大乘でもこの三種を別々に行ふてあるけれども祖師門下では別々
 に行はずして一つに行ふのであるから教家の所説と大に異なる。
 これらを以ても教外別傳の趣は自ら一種特妙であるといふことが
 知れるじや。先づ本文に就いて解釋をしよう。サテ佛祖單傳の坐
 禪といふは教行證の三の中に入るわけではないけれどモ自らこの
 三徳を兼ねて居るじや。そのわけは教行證の證といふハサトリと
 讀み、教家では修行を積でその境に悟を開くこととて即ち悟を得るを
 目的として修行をしたのちに得たる結果を云ふのであるが、祖師門
 下では修證不二と云て修行と證悟と別々にしないのであるから待
 悟を規則としたる證は坐禪の本分といたさぬ、行も通途の如く教説

を聞きしるれを色々と思考した上で身で實踐躬行するのではなく。教も師の説をその口より聞いて之を信仰し惡事を斷つて善事を行ふといふ義ではない。禪門ではたとひ教といふものを立てても尋常一般の教とは大に異なる、尋常の教といふはコレくかやうくと。言句文字を以て説き示すことを云ふのであるが祖師門下の直指單傳の道は舉體即ち全身のままがぢさに説法じや、擧足下足、行住坐臥の上がぢさに説法じや。うれゆゑ説法の言語も本より一章一句といふ段落もない、口舌にかゝらぬ説法、文字に墮ちぬ説法に首も尾もあらう筈はない。意盡き理窮まる處に一言を發するや直に八万四千の法門どころではない十方虚空を盡くして居る、ケレドモ無舌の語無言の説であるから會てるの痕迹がない、これを絲毫も未だ擧揚せずといふ。ナント佛、祖真正の教といふものは違ふたものではあるまいか。又行といふことも談ずるは談ずるなれども、これまた

教家と異なつて無爲の行じや。身に燒香禮拜といふやうな務を行ふでもなく、口に眞言陀羅尼等を誦するでもなく、心に種々の觀念觀法をするでもなくして、眼耳鼻舌身意の六根自ら清淨にして、一切の事柄の爲めに染汚せられず聲聞緣覺菩薩等の行にも拘へらす直に諸佛の行を修するのである。サテ佛教では四聖六凡といふことを立て、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六種は凡夫の境界であるから六凡といひ、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四種の聖人の位であるから四聖といふが、まづ聲聞といふは佛の口づから説法即ち佛の音聲を聞いて悟道するに由て聲聞といふ、その聲聞の修行に苦集滅道といふ、四種がある、之を四諦といふ、四諦に各々四種の修行の仕方がある、これを聲聞の十六行と云ふ、次に前にザツト釋して置いた十二因縁といふ觀法を修して悟を開くを緣覺といひ、この十二因縁を緣覺の十二行といふ。次に菩薩といふは梵語て有て覺有情と翻譯する。覺はサトルといふ

ふ義である、佛は覺が開けて有て全く情識は盡きて居る、衆生は情識のみ有て覺が開けぬ、菩薩は覺は開けて居ても未だ情識が盡きないから覺、有情といふ。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、これを六度といふ、萬行は大數を云ふたのじや、この六度萬行が菩薩の修行である、委いことは『天台四教儀』等に説てあるから就て見るがよい、サテ前に還て祖師門下が行といふはザット話したやうな聲聞の十六行や、緣覺の十二行、菩薩の六度萬行といふやうなわけでなく、すべて煩惱を除て菩提を求め、生死を離れ涅槃に入るといふやうな修證各別の行てはない。一切不爲、即ち無造作不染汚の境界であるから名けて佛といふのじや、即ち一超直入如來地の修行じや、諸佛の自受用三昧と云ふはこの坐禪であるから此の坐禪を修すればそのまゝ諸佛の自受用三昧に安住するのじや、諸佛の受用するところ即ち菩薩の安樂行である、四安樂行といふは、身口意の三業に於て不善を行はず、大慈悲心を

起し衆生を濟度せんとの誓願を立て、之を行ふことじや、これも委しいことは『法華經』の「安樂行品」といふに説いてある、その四安樂行を自由に行ふてゆく、かく身口意の三業に於て拘束せらるゝことなく、無爲不染汚にして聲聞緣覺菩薩の諸行を超越して、而も自ら諸佛の妙行に契ふてゆくといふものは實に祖師門下甚深微妙不可思議の行じや。又證といふことも説くなれども修に對するの證でなく修證不二の證であるから無證の證といふ、この無證の證は、諸の三昧の中に冠たるものであるから三昧王、三昧と云ふ、三昧は前にもぎつと申したがツマリ行持といふほどのこと、この證は生死を解脱する大智を發するをもて無生智發現三昧と云ふ、無生智は一切空平等なるがゆゑに一切智となし。一切智は修習覺察を以て得るところにあらざるが故に自然智となす、以上の諸智を總稱して如來智といふ、この正智はすなはち大安樂行なる坐禪より發するのである、この大安

行は凡聖の格式を超越し、迷を去て悟に就くと云ふやうな妄情分別を離れてゐる、これを本有大覺の證と云ふ

又坐禪者、非千戒定慧而兼此三學。謂戒是防非止惡。坐禪觀學體無二。拋下萬事。休息諸緣。佛法世法不管。道情世情雙忘。無是非。無善惡。何防止之有乎。此是心地無相戒也。定是觀想無餘。坐禪脫落身心。捨離迷悟。不變不動。不爲不味。如癡如兀。如山如海。動靜二相了然不生。定而無定相。無定相。故名大定也。慧是簡擇覺了。坐禪所知自滅。心識永忘。通身慧眼。無有簡覺。明見佛性。本不迷惑。坐斷意根。廓然瑩徹。是慧而無慧相。無慧相故名大慧也。諸佛教門。一代諸說。無不總收。戒定慧中。今坐禪者。無戒不持。無定不修。無慧不通。

降魔成道。轉輪涅槃。皆依此力。神通妙用。放光說法。盡在打坐也。

又この坐禪は戒定慧にかゝはらない。戒定慧は委しく云へば戒律、禪定、智慧にて、これを三學といふか、今佛祖正傳の坐禪は通途に謂ふところの戒定慧にかゝはらぬ、ケレトモ自然にこの三學を兼ねて居る。そのわけはと謂へば、戒といふは防非止惡とて諸の非をふせぎ一切の惡を止むる義である。この戒に五戒、十戒、四十八戒、二百五十戒、五百戒等の輕重差別もあるが、つまり邪念を止め惡事をせぬやうにどのいましめである。それであるから邪念、惡事があるければ別段に戒律といふものはいらぬじや。しかるに坐禪の上では舉體無二といつて善惡、邪正等のすべての二見對待と觀ないであるから身心も性相も一如じやと觀するのじや。且つ坐禪の上にて

は万事を抛下て、諸縁といつて此の方の身や心のひかされる一切の事柄をやめ、佛法にも世法にもかまはず、道情も世情も共に打ちわすれ、是非善悪を思はず又なしもせぬ。サテ世法に管せず、世情を忘れるといふことは別に不思議にも思はれまいが、佛法にも管せず、道情をも忘るるといふは一寸分からぬやうに思はるかもしれないが、佛法といふも畢竟世の人々の迷の病を療治する爲めの薬であつて、無病の人即ち迷はぬものには用がない。しかるに佛法の結構なものじやといつまでも珍重して居てはまた一種の病であつてこれを法執といふ。坐禪は不迷不悟の境界に達するのであるから、これは世法じや、これの佛法じやといふ對待を見ない。それゆゑ佛道といふものにも、世事といふものにも愛着の情念を生ずるのはよくないから、どちらでも打ち忘れねはならぬ。かくすべての對待を離れてみれば善悪も是非もない、是非善悪がなければ防止すなはち非を防ぎ悪を

止めるといふ戒律の必要のあるべき筈はないから、別段に戒律を守るといはずとも自然に戒律を持つてゆくわけである。これを心地無相の戒といふ、即ち不殺生、不偷盜等の戒律の形相について一つ一つ別にして持たず、直に心の上から根本的に一切の戒律の精神に通達して、別段に戒律を守る守らぬといふ考を起さずとも自ら戒律に契ふてゆくのである。次に禪定は觀想無餘といつて心が一處に住しているいろの妄想分別を起さず不動着の境界に在るをいふのであるが、坐禪の上では吾が身、吾が心も脱落とモヌケて桶の底がぬけて水もたまらず月影もやとらずといふ境界になり、迷も悟もともに打ちあられ、不變不動にして一切の事をなさず一切の事を味さず、丸で傍からみては癡のごとく兀といつて頑石のごとく、また山の不動着のごとく、海の湛然たるのごとくにして、動相、靜相の二がおのつから生ぜぬ。この了然不生のときには動くものを靜めて動かさないや

うにして不動となつたのではなく、動と静との對待の相が自ら立ぬ、即ち禪定に入て居ながら禪定の形相が立ぬ定にして定相がないからこれを大禪定といふのじや。次に智慧といふは、簡擇覺了の義、簡擇はどちらにもエラブと讀み、覺了は共にサトルと訓じて、物の是非善惡等をハツキリと簡別してシカト心に納得するといふ義であるが、これも坐禪の上では所知といふて此の方に知らるゝ所の物と、物を知るところの此の方との對待を離れるから所知の前境は自ら消滅し、前境を知る此の方の心識もうちわすれる、所知滅し心識忘すといふは、物と我の分界のなくなることで、これを心境雙亡といふ。この心境雙亡の境界に至れば此の方の總身が大智慧の眼となつて觀音の千手千眼どころではなく、百千無量の神通妙用が自由自在にあらはれてくるから、特別に簡擇し覺了する必要はない。このときに自己本有の佛性を分明に徹見し、本より迷ふても感ふても居なかつた

といふことをスツカと合點し、一切時に處し一切事に對して意根即ち第六意識の分別知識の作用を借らすして胸中一點のくもりなく恰も水晶にもうつるが如く分明に知れわたりて毫もくらすことがない、これ智慧にして智慧の相がないから大智慧といふ。さて三世諸佛の教は八萬四千の法門といひ釋尊一代の説法三百餘會といつて種々様々あれども此の戒定慧の三の中に收まつてある。しかるに今この坐禪を修するときはあらゆる戒律一として持たずといふことなく、あらゆる禪定一として修めずといふことなく、あらゆる智慧一として通せずといふことなく、イヤ釋尊が六年修行の後に魔軍が逼り來つたとき難なくこれを降伏し、三十の年に夜明の明星を見て豁然と大悟してこの無上の大道を成就なされたのも、成道の後四十九年間三百餘會の法輪を轉せられたのも、法輪を轉するといふは説法教化のことじや。涅槃は滅度と譯して、釋尊の御崩れにな

つたことを云ふ。その法輪を轉しなされたのも涅槃に入て御崩になつたのもみなこの坐禪の力である。承陽大師の坐禪儀には超凡越聖坐脱立亡も此の力に一任すと仰せられた。また佛が種々の神通妙用を現はし眉間の白毫より光明を放ち或は大地に六種の震動を興へなとして御說法なされたのもみなこの坐禪の功力に由るのである。要するに坐禪を修するときは一切諸の功德その中に自ら具つても缺くるところはないから王三昧とも名けたのじや。

且參禪亦坐禪也。

參禪とは師家に就て古則公案等の拈提を聴き問答商量をなし或は呈解といつて自己の見解を師家に陳べ請語といつて師家より緊要なる一句一語を聴き受け又は入室といつて師家の室に入て垂詢を受けなとすることを云ふが今この祖師門下ではその參禪も矢張坐

禪じやと唱へる。それゆゑ天童如淨禪師や承陽大師の語録の中には參禪は坐禪なりとの語が多くある。これも上と同じむけで坐禪をするときは一切の法門悉くその中に具はるから別に參禪といふて分けないのである。これらのところは他家の唱へ方と些相違してゐるが實際かくなくてはならぬ。

欲坐禪者先靜處宜焉。茵褥須厚敷。莫教風煙入。勿令雨露侵。護持容膝地。清潔打坐處。雖有昔人坐。金剛座。坐盤石上之蹤跡。亦無不有坐物。坐處當應晝不明。夜不暗。冬暖夏冷。是其術也。

こゝは坐禪をする場處に就ての示しや。先づ第一に坐禪の場處は賑な處は氣が散亂するから閑靜な處がよろしい。次に茵褥はなるべく厚るのがよら。これらのとは前にもあつた。又坐禪の室へは風

や煙の這入らぬやうに雨露が漏るやうなことの無いやうにせねば
 身軀をろこなうからよく注意すべきじや。膝を容るゝの地は自分
 の坐る處打坐の處と同じこと。自分の坐る處はよく注意してなる
 べく掃除を怠らぬやうにして清潔にしておくがよい、そうでないと
 病氣にある。昔人といふは釋尊は成道の時に金剛座に坐し給ひ石
 頭希遷禪師は盤石の上に坐禪せられたから世人か石頭和尚と呼ぶ
 やうになつた。かやうに古人は樹下石上に坐禪せられた例もあれ
 どもそれは樹下石上にデカに坐られたのではなく必ず坐物を敷て
 坐られた釋尊は吉祥草といふ草をしいて坐し給ひたといふことじ
 や、又坐禪の室は晝はあまり明るく夜は暗くないやうにするかよ
 いから晝は帳といふものを降り夜は燈を點じ、また冬は爐を開て暖
 にし夏は簾でもさげて涼しくして坐るのが坐禪の仕方であるから
 よく心得て行ふがよい。

放捨心意識。休息念想觀。勿圖作佛。勿管是非。護惜光陰。如
 救頭燃。如來端坐。少林面壁。打成一片。都無他事。石霜擬枯
 木。大白責坐睡。不用燒香禮拜。念佛。修懺。看經。持課。祇管打
 坐始得。

こゝもまた坐禪の用心を示さる。先づ第一に住處を擇ひて健康に
 適するやうに致し、次に坐禪をする上に於て注意のしやうが肝要じ
 や、念想觀とは四念處、九想、五停心觀など、云ふ觀法の名目有て教
 家ではそれ々々委い解釋を致すが、そのやうな觀念觀法もせず、一切
 の思量分別計較十度を斷ち捨て、佛と作ることをも求めてはなら
 ぬ、これは轉凡入聖とて凡夫の位置を轉えて佛の位に入るのが佛法
 の目的であるとは通途であるけれども、祖師門下の禪は待悟禪と云
 つて悟を得るを目的として修めるのではなく、只たこれ佛行として

修むるのであるから、大千沙界一蒲團と衆生も佛も迷も悟も生死も
 涅槃も總べて一蒲團下に坐断して、一切是非善惡を管せず、只光陰を
 惜て恰も頭に火の燃えついたのをとりのけるやうに毫も油断なく、
 餘念に涉らず專一に工夫辨道してゆくのである。釋迦如來が端坐六
 年、達磨大師が少林山に於て面壁九年なされたやうに打成一片とて
 一切の他事を離れて眞一文字に精勤するのじや。そのところを
 石霜慶諸禪師は「寒灰枯木にし去れ」と云はれた、こゝで枯木と云ふの
 は、只妄想分別の起るのを強めて抑へつけて石地癩のやうにせよと
 のことでない實際無心々々徹底無心大無心といふあんばいになる
 ことじや。サテ無心と云へば直に睡氣が催ふしてあらぬものであ
 るからソコデ太白即ち天童如淨禪師も「參禪は第一に瞎睡すること
 莫れ」と痛く諷められた。又坐禪中には佛前に向て燒香禮拜念佛修
 懺看經持課等をなすに及ばぬ修懺は自分で犯したる罪過を有体に

白狀して佛祖に懺悔すること、及びその他種々の行持課業もあるが、
 すべてろのやうな事を行ふに及ばぬ。これも坐禪の上に自ら備は
 つて居るから別段に一行はすともよいから、祇管一意専心に坐り
 さへすればるれで自ら不染汚の修證があらはれる。

大抵坐禪時、可搭袈裟。除開定前後、夜與三時。莫略蒲團。經直一尺二寸、周圍三尺六寸。非全支趺
 坐。自跏趺半。而後至脊骨下。是佛祖之坐法也。或結跏趺坐。
 或半跏坐。結跏法者、先以右足置左脞上。以左足置右脞上。
 而寬繫衣物。帶紐。可令齊整。次以右手安左足上。以左手坐右
 手上。兩手大指相拄。近身拄指對頭。當對臍。安正身端坐。不
 得左側右傾。前躬後仰。耳與肩。鼻與臍。必俱相對。舌拄上腭。
 息從鼻通。唇齒相着。眼須正開。不張不微。如是調身已。欠氣

安息所謂開口吐氣一兩息也。次須坐定搖身七八度。自麤至細。兀兀端坐也。

こゝは坐禪の儀式作法を示さる。坐禪をするときは大抵袈裟を搭けるのが作法である。袈裟の下に開定の前後と夜と晡時とを除く。ある開定とは禪定を開くといふ義で坐禪より起つことで入定といふはこれから坐禪するものであるが、この開定といふは曉天に坐禪をしてるの坐禪をしてその坐禪を起つことを云ふ。この開定の前後と夜間と及び晡時と云つて今の四時より五時までの頃に行ふ時だけは袈裟を搭けずともよい。蒲團とは今時着て臥る夜具又は敷蒲團のことではなく、夾註にある通り經亘一尺二寸に周圍三尺六寸の「坐蒲」といふて坐蒲團の丸いやうなもので、前に有た坐物の上に敷くのじやこれを敷かないと冷たり痛たりするから必ず敷て坐ること、その

蒲團を敷くのじや、坐して居る臂の全分を支て敷かず、臂を半分ほどかけて脊骨の下から敷團の中央になるやうにして敷く、これが佛祖の坐法じや。サテ坐禪に結跏趺坐と半跏趺坐といふ二種の仕方がある。跏趺と云ふは足を重ねて組合せる義、結跏趺坐の作法は先づ右の足を左の脛の上に置き又左の足を右の脛の上に置いて、それからの上にユツタリと衣物をかけて齊整とキチンとしておく、衣物とは袈裟衣のこと、その下に內衣は紐を帶すとある、これは衣のひもを結んでおくといふこと、次に右の手を左の足の上に置き又左の手を右の掌の上におき、両手の大指を向合せて相拄へて、躰の方に近かよせて相ひつき合せたる、兩拇指の頭は臍に對しておくのじや。かく正身端坐して、左の方にかたより若くは右の方へ傾き、あるひは前の方にくいまり、または後の方に仰くやうなこと、かく耳と肩と相對し、鼻と臍と相對せねばならぬ。耳と肩と肩と對し、鼻と鼻と對するやうに

すればイヤでも眞直に坐ることになる。それから舌は上脰に着け、息は鼻から通して口は結んで唇と齒とはキチント着け眼は閉らずにハッキリと開く、口の開き方も餘り張り過ぎず、さればとてまた餘り微くもよろしくないからの中位に開くがよい。かやうに身相を調へたところで欠氣して安息す即ち口を閉て内から氣息を吐き出すこと一兩度する、かうして息を調へるのじや。次に坐り込んでから身體を左右に振ること七八度、うの振るのに初めは麤くして次第に細く振り、段々ともとのまゝにかへるやうな工合にして、兀兀と大盤石の如く不動に坐りこむのである、これ先づ坐禪をする即ち入定の作法の概畧じや。

於此思量不思量底如何思量謂非思量此乃坐禪要法也。
直須破斷煩惱親證菩提。

こゝは坐禪中の工夫の仕方を示めさる。サテ上の通り坐相が調ふた上で如何やうに工夫したものか。他門あらば種々の仕方もあるが、祖師門下では別段込入たことはない、不思量底を思量す、通途種々の思量分別するのは有心凡夫の境界しや、また思量を絶ちて謂はゆる灰心滅智と云つて枯木頑石の如くになつて居るのは二乗の無心に墮る。有心無心とちらも一方に墮るのはよろしくない、ソコで不思量底を思量せよと云はれた、不思量底をどう思量したものであるかといふに非思量じや、この非思量といふは思量、不思量の兩頭、有心無心の兩邊に墮らない。指月和尚も『坐禪儀不能語』に「思量の現前する直下非なり、非は除却を云ふにあらず即ち是れ思量の眞實體なり」と云はれて、有て、朝から晩まで絶えず起るところの種々無量の思量がとりもなほさず直に非思量となる、すなはち思量の蹤跡がない、古人はこゝを熱鐵上に寸塵を立せずと云はれたが、この寸塵

不立の當體に於てハ迷悟凡聖の沙汰を絶し眞智妄想の差別を見ず、酒々落々にして無碍自在じや、工夫といふはこの通りて有るから別段に奇特玄妙の理を考へ出すやうな事ではない。イヤこの當體に於てはどのやうな奇特玄妙も更に無用じや。坐禪の要術といふは非思量の三字に過ぎないものであるから、よくよく實究すべし。かくして煩惱を破り、したしく菩提すなはち大道の端的を證るべきじや。煩惱を斷ち菩提を證るといへば、何か斷つものと證るものと二物ありて取捨するやうであるが。直にと云ふ字が眼目である、別に對待に涉るのでなく、出息入息非思量の當體に契ふてゆけばそれがそのまゝ、斷證じや。

若欲定起。先兩手仰安。兩膝上搖身。七八度。自細至麤。開口吐氣。伸兩手捺地。輕輕起坐。徐徐行步。須順轉順行。

これまでは入定といつて坐禪する時の儀式作法并に坐禪中の心得方などを示されたが、これから出定といつて坐禪より起つときの作法を示されるのじや。加趺坐より起つ即ち禪定より起たうと思ふときには、先づ兩手を仰ひけて兩方の膝の上のせなむら、身を搖振ること七八度すべし。その搖振るのに始めのほどは細くゆりはじめ、段々と次第に麤くするのである。それから口を開けて氣息を吐き出し、次に兩手を伸ばして地を捺へて軽く坐を起ち徐々ど行歩きはじめ、順に轉して順にあるくのてある。サテ入定の時には身を搖振るのに麤より細に至るのであるが、出定の時には全くうらはらである、これ即ち入定と出定とについて其作法の違ふところじや、口を開けて氣息を吐き、手を以て地を捺へて起つのは先づ内より動かしはじめ、それから外に及ぶわけである。これも入定の時には先づ身體手足等を収め、身相を調へて、それから氣息を吐くのであるが、今出

定の時は全くうらはらじや、すべてこれらはみを入定と出定とに於て相違して居る。マタ坐より起て行歩くのは經行といふが、これは退屈を晴らして氣分を爽快にする爲めじや。この經行をするに徐々として行歩くのは佛も定より起つて經行をなされるのに「安詳而起」といふことが諸經文に見えて居て、すべて暴卒の振舞はよろしくないからのことじや。經行の仕方は直往直來と云つて「丁度機絲の經を整るやうなアン・パイにするのである。しかるに後世に及んでグル／＼と折り繞はるやうなことに考へて繞行する輩があるが、これは大いなる間違じや。眞實古道を行ふものは能く／＼注意すべきことである。順轉順行といふは先づ左よりあるきはじめて右に轉ずるのじや、即ち左に歩いてゆきつきたところで右に轉ずるのじや、この經行をする時には又手當胸と云つて、左の手を以て緊く右の手を把て胸の前に安くのである。

坐中若昏睡來常應搖身或張目又安心於頂上髮際眉間。猶未醒時引手應拭目或摩身猶未醒時起座經行。正要順行順行若及一百許步昏睡必醒而經行法者一息恒半步行亦如不行寂靜而不動。

さて又坐禪をして居るうちに若し昏睡が催ふして來たことならば、身を振搖り、或は兩眼を張り、或は心を頂上、あるひは髮際、あるひは眉間に安くべし、これは先づ身を搖振り、それでも醒めぬときは兩眼を張り、それでもまだ醒めぬときは心を髮際等に安くのであつて、一度にこの五つ通の事をせよといふわけではない、この中一事で醒めさへすれば、その餘の事はなさずともよろしいが、只一事だけでは醒めぬときに手段を換えて醒ますために斯く示されたのじや。斯く先づ五つ通りの事を行ふて見ても、未だ醒めぬときは組で居る手を引い

て目を拭ひ、或は身を摩るがよろしい。斯くしても猶ほも醒めぬときは座を起て經行をするがよろしい、その經行をするのには先に有た通り順行するのじや、若し順行をするると大凡そ百歩ばかりもなしたらば必ず醒めるのであらう、そしてまた經行の仕方、即ち脚を移すの法は極めて徐々として、一息の間に半歩を移すのじや、一息といふは出息と入息とを併せて云ふ。一息半歩といへば、随分遅いあるさ方であるから行歩いて居ても側から見ても行歩いて居るか歩行いて居るか分からぬほどに行歩くのじや、經行中は始終寂靜にして少しも動搖に涉らぬやうにすべきである、これ即ち佛祖正傳の經行の法じや。しかるに或る派では經行をするに直綴の袖をまくりわけ、裳をからげて僧堂の内を叫喚しながら馳けまはるなをして、それが正傳の儀式と云て居るが、實に間違切た話である。これらの輩は畢竟經行の何物たることを知らずして亂暴の舉動を以て、活潑と思

ふて居るのじやが、經といふものゝ消化をよくし、屈を散し、疲勞を慰め、昏睡を醒ます爲めに行ふものであるから、決して亂暴の舉動、輕忽の振舞に涉るべきでない。

如是經行猶未醒時、或濯目冷頂、或誦菩薩戒序種種方便、勿令睡眠、當觀生死事大、無常迅速、道眼未明、昏睡何爲、昏睡頻來、應發願云、業習已厚、故今被睡眠、蓋昏蒙何時醒、願佛祖垂大悲、拔我昏重苦。

かく種々と手段を換えて、たりまた斯く佛祖の儀式に隨て經行をしても、それでもまだ睡の醒めぬときは、或は兩眼を水で濯ひ、又に水をもつて頂を冷し、或は菩薩戒の序を誦むがよい、菩薩戒の序といふは梵網菩薩戒經といふ菩薩の行ふべき戒法を説いた經文がある、その菩薩戒經に羅什三藏といふ人が天竺から譯誦して來たといふ序

文がある。その序文の中に「人の命の無常なること、山の水より過ぎたり、今日は存すといへども、曉けんまでは保ち難し」なほいふやうな無常の道理を説いて、佛道修行を怠らぬやうとの戒めの言葉があるから、それらを誦んで自ら警醒するがよい。かやうに種々様々で方便を盡くして睡らぬやうにせねばならぬ。生死事大、無常迅速の八字は永嘉大師が六祖大鑑慧能大師に始めて参せられたときの言葉であるが、その意味は、人間の最も大切な事は何であるかといへば、生れると死ぬるといふ事じや、それゆゑ生れるのは何處から生れて来た死ぬるのはどういふわけじや、死で何處へゆくのかと、生死畢竟如何といふことをシカト悟り明らめるのが一番大切な事である。しかるに吾々のこの身は無情迅速で一息の間に存して居る、出た息が引かぬやうになるか引いた息が出ぬやうになつたらぬやうに、死や、無常とも何ともいふて見やうのないはかないものであつて、光陰

は念々刻々にうつりゆいて、少しも持て暫しかならぬものであるから、佛道修行には暫時も猶豫はならぬとの意である。かやうな身の上であるのに、自分は未だ佛道の正眼が開けぬにナニして睡るとのあらうかと、觀念を凝らして氣を勵ますよ。若しまたるれでも昏睡が頻りに催ふして来たならば、誓願を起して、佛祖が加被を祈るのじや、その誓願の言葉には業習己に厚故に今睡眠蓋を被る、前世の悪業の薫習が一方ならず厚いからして、今世に於て睡眠蓋を被るのである。睡眠蓋のことは前にも一寸辯じて置たが、これは五蓋といつて本心を蓋ひ味ますものが五つあるその中の一つで、睡眠がかく催ふして辨道の妨げをするときは、本心の昏蒙は何時まで立つても晴れる時節はないから、三世の諸佛、歴代の祖師、何卒大慈大悲の憐愍を垂れさせ給ひて、この一方ならぬ昏睡の苦を抜き取り給ひと云つて、一心に祈誓を凝らして、佛祖の加被力を仰ぐかよい、これが睡を醒ます

の方じや。

心若散亂時安心鼻端丹田數出入息猶未休時須一則公案提撕學覺謂是何物恁麼來狗子無佛性雪門須彌山趙州栢樹子等沒滋味談是其所應也。

上は睡を醒ますの方を示されたが此處の睡の醒めたところで心か散亂することがあるから、その散亂を休める方を示されるのじや。若し心が散亂して鎮まらぬときは心を鼻端若しくは丹田に安いて出入の息を數へるがよろしい。出入の息を數へるには出る息と入る息を合せて一息として數へる方もあり、又只出る息だけを數へ、或は入る息だけを數へるのもあるが、どちらにしても段異りはないが、但數を計るには一から始めて十に至り、また一に還して十まで數へるのであつて、十以上の數を計へぬがよろしい、それは餘光澤山の

數を計へるやうになると自然にその數を計へるために心を勞するやうになつてそれか爲めに益々心か鎮まらぬやうになるからのことである、心を鼻端丹田に安くといふことは前にも出て居たが、鼻端は息の盡きるところ、丹田は息の出るところで有て、息の出入の處に心を安いて息を數へるときは、これすなわち生死の何物を究盡するのであるからかやうにいたすのじや。斯くしても猶ほ心の散亂が治まらぬときは、一則の公案を提撕して工夫するがよい。公案といふは公府の案牘といふ義である、公府の案牘といふものは公府の吏がうれに據て天下の不正を斷ずるところの掟であるが、今は古來佛祖の大法を商量問答せられた事柄を記したものを云ふのである、これは師家が古人の商量問答せられた事柄に據て學人の妄情疑惑を破つて生死の窠窟を脱せしむ者であるから、喩を公府の案牘に取て公案と云つたものじや。その公案の一篇を一則といふが、これも

則といふ義で公案といふ文字の縁からかやうに稱へるのであらう。その公案を拈提して如何々々と參究するがよろしい。謂は述釋の辭と云ふて、さらばどういふアンバイ、如何様にしてよいぞとあらば、箇様々々にするがよいと説き出すときの辭じや、公案も一千七百則と昔からいつて随分その數も多いことであるが、その中でも是れ何物か恁麼に來る、これは南嶽懷讓禪師が六祖慧能禪師に始めて參せられた時に、六祖問ふて云はれるには什麼の處より來るとソコで南嶽は嵩山安國師の處より來ると答へられたスルト六祖は是れ什麼物か恁麼に來ると問ひつめられた、これは嵩山安國師の處から來たといふは聞へて居るが、安國師の處から一體什麼物があのやうに來たか、かく此處に參つたものは何物ぞといふ問意じやが、この時南嶽はこの什麼物か恁麼に來るがサツパリ解せなかつたから其後八ヶ年の間始終は什麼物恁麼來といふ一句を工夫して八年目に漸く會

得が出來たといふので、六祖が如何様に會したぞと問はれたとき、南嶽曰く、説似一物即不中、六祖曰く、還假修證不、南嶽曰く、修證即不無染汚即不得と、これを南嶽説似一物話と云ふ。こゝては只是什麼物恁麼來の八字が肝要じや。それから狗子無佛性、これは趙州從諗禪師に或る僧が狗子に還て佛性有りや也た無しやと問ふたれば、趙州か「無」と答へられた、これを趙州狗子話と云ふ。次に雲門の須彌山、これは雲門匡眞禪師に或る僧が不起一念還て過ありや否やと問ふたとき、雲門が「須彌山」と答へられた、之を雲門須彌山話といふ。次に趙州の栢樹子、これは趙州に或る僧が如何なるか是れ祖師西來意と問ふたとき、趙州が「庭前の栢樹子」と答へられた、これを趙州栢樹話といふ。これらの没滋味の談といつて旨味鹽氣もない、丸で齒も牙も立たぬところの話頭が、斯るときには最も適當じや、何故といふに、これらの公案の文字上に就て思慮分別を運らし、計較卜度を容れてみやうが

ないから、散亂心を休めるには是非とも斯様なのでなくてはならぬ。

猶未休時向一息截斷。兩眼永閉。端的。打坐工夫。或向胞胎未生不起一念已前。行履工夫。二空忽生。散心必歇。

斯様の話頭を提撕しても猶ほ散亂が休まぬときは一息截斷兩眼永閉。閉つるの端的。即ち出入の一息がキレて兩眼ともに永く閉ぢ切たときの有様になつてみよ。このとき十方世界、森羅萬象、何物かある、否この身すでに死したる何の心があつて散亂する、念起念滅して更に止むとしないのは畢竟自己といふもの存在して居るからのことじや、しかるに此の身既に一息截斷し兩眼永く閉ぢて死切てしまつたとき何の念があつて起滅するぞ、これを大死底の工夫と云が、先づこの大死底の工夫を試みるがよい。或は胞胎未生、不起一念已前に向て行履工夫せよ、胞胎未生とは此の身か未だ母の胎内に宿らぬ以

前の時のこと、不起一念已前は善とも惡とも一念も萌さぬ以前のこときのとじや、この身が母の胎内に宿らぬ先きには何處に「吾」といふものがあるか、何處に「此の身」「此の心」といふものが、吾といふもの、此の身といふもの、此の心といふものが無いならば何物が念起念滅するぞ、又一念不起の以前に於ては善惡、是非、迷悟、得失といふやうなものがあるべき筈はないじや、これは此の身の生れぬ已前、一念の萌さぬ已前に立ち還て看れば念起念滅すべきものがないから、かやうに工夫してみよとなり。ツマリ現在の此の身、此の心といふものを離れて、或は此の身が既に死切た時にあつて工夫し、又は此の身か未だ生れざる已前に立ち還て工夫してみよ、是れと云つて念起念滅する物のあゝいことぶ分かる、この時に我と認むべきものもなく、我に對する萬物といふものない、即ち自他の對待がなくなる、これを二空と云ふ、この二空の理がハッキリと悟れた上は散亂の心は必ず休んで決して復

び起るものではないから、斯の工夫が肝要じゃ。

百

起定之後。不思量而現威儀時。見成即公案。不回互而成修證時。公案即見成。朕兆已前之消息。空却那畔之因緣。佛祖靈機樞要。唯此一事也。直須休去。歇去。冷湫湫地去。一念萬年去。寒灰枯木去。古廟香爐去。一條白練去。至禱至禱。

斯くの如くにして禪定より起たのちに於て思量せずして威儀を現する時は見成即ち公案なりと云ふは、既に自他人我といものを離れて居る以上は一切時に於て思量分別に涉らず、取捨憎愛に墮らぬ、思慮分別に涉らず、取捨憎愛に墮ちすして、着衣喫飯行住坐臥、悠悠々々無碍自由自在なる時は、朝より暮に至るまで一切の爲る事、作す事が、一々みなるのまゝ、佛祖の公案とあらはれてくる、回互といふは此の方と前境と相對すること、即ち眼耳鼻舌身意の六根と色聲香味觸法の六

境と相接することを云ふのであるが、これは此の方の六根と此の方に對する六境との對待を見ての上の辭じゃ。しかるに今は不回互といふのであるから、根境相對せまいことにあるが、これは決して眼に色を見ず、耳に聲を聞かぬといふわけではなく、色を見、聲を聞く上に於て根と境、即ち自と他との對待を見ないのじゃ。根境自他の對待に涉らすして修證自らるの間に現成するときは、これ即ち公案の見成じゃ。斯くの如くなるときは、今日從晝至夜の起居動作が直に朕兆已前の消息じゃ。朕兆はキサシといふことにて天地の始まりのキサシあるもの以前といふことであれば、何とも平ともいふてみやうもあい空々寂々の有様じゃ、空却那畔の因緣といふは成住壞空の四劫といふことが有つてこの世界がこわれてしまつた後には、久しい間日月草木國土人畜家屋もなく丸のからであるといふが、その久しい年月の間丸でからで有るときのこと、空却といふ、那畔はホ

百一

トリといふ義であるから其時といふほどのこと、因縁も消息と同じく有様といふほどの意であるから、矢張空界無物の時の有様といふことじや、即ち今日見聞覺知の上が直に空々寂々にして少しも見聞覺知の迹のないことを云ふのじや。この朕兆已前の消息空劫那畔の因縁は三世の諸佛、歴代の祖師の靈機樞要であつて佛祖の機要は唯この一事だけじや。休し去りより一條白練にし去るといふところまでは石霜慶諸禪師の語で有つて去の字が七つ續いて有るから古よりこれを石霜の七去と云ひ來て居る、休去歇去冷湫湫去といふは文字の上では萬事を抛ち諸縁を離れ、是非善惡迷悟凡聖等一切の思慮分別を離れ切て無心々々徹底無心大無心といふ場合に至れといふほどの意、一念萬年去は一念と萬年との別を見あいつこにて矢張大無心の當体じや。寒灰枯木去は分つて居る、古廟香爐去は古い廟の香爐には誰も香火を手ひけるものなきゆるゑに暖氣熱氣は一點

もない一條白練去は清淨潔白一點の塵埃なき有様じや。石霜が斯く七つまでも去の字を續けて云はれたのは學人をして毫釐もその處に住着せしめぬためであるからその意を能く會得せねばならぬ、只この文字の上に向て見解を下し空々寂々の死漢に墮し了ては何の益もあひ、太祖國師が一篇の終にこれを置かれたのも同じ意で有て、佛佛祖祖の靈機樞要は唯此の一事なりとあるからとて、これが靈機樞要であると奇特玄妙の思をあしてそれを珍重して居てはならぬから、石霜の云はれた如く直に須くろの靈機樞要といふものをも守らすして休し去り歇し去り乃至一條白練にし去るべし、祈禱々々と實に涙は痛腸より出づる大慈大悲の至囑であるから、此の篇を拜讀する者は能く國師の懇切周到なる訓誡を遵奉して頭燃を救ふが如くにして辨道工夫すべきじや。

坐禪用心記講義終

普勸坐禪儀講義

山田孝道講述

此の書は曹洞宗の宗祖道元禪師承陽大師か安貞二年宋國より歸朝の後京都建仁寺寓居中（せんじゅうちゅう）に撰述（せんじゆつ）なし給ひたる所にして、實に日本曹洞宗開創第一最初の本典なり。故に古來より諸處の叢林等に於て坐禪の時には毎に拜誦することになり居て、年少の沙彌（しゃみ）と雖も皆よく記憶（きおく）する所なれども、其の趣旨に至りては高大深遠にして容易に了解し難し。本篇の注釋（しゆしやく）に就ては面山の「聞解指月の不能語等（もんげしゆげつのかんごうごとう）あり、何れも叮嚀親切なれども、専門に佛教を學ひ宗乘に參するの人にあらずれば解し難きところ少からざるにより、初心晩學若くは在家の信徒居士等にして、參禪の志あり本篇を拜讀せんと思ふ人々には頗る

遺憾あるを免れず。依て今は極めて平易簡短に解釋を試みんとす、其の意只た初めて此等の佛書を繙き宗乘に參せんとす人々の爲めに本篇の一斑を知らしめんとするに在るのみ。

扱題號の普勸とはアマチクス、メルと訓して、此の坐禪は賢愚利鈍男女老幼に拘らす何人も能く修し得らるゝ所の妙行あれば佛道を學ぶ者の皆此の坐禪を修すへしなり。次に坐禪儀とは坐禪を行ふ儀式作法といふ義なれど、單に外形の式法のみならず、坐禪に關する總ての用心をもこの中に委曲に説示し給へるなり。坐禪といふ辭は梵漢作用の語にて坐は漢語なり禪は梵語にて委しく云へは禪那にして漢語に譯せば靜慮といふ、即ちシズカニオモヒハカルと訓するより坐禪觀法等の熟字もありて、一種の觀念と解するは世間一般の釋なれど今は決して然らず。全體坐禪にも外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、最上乘禪等種々ありて一様ならず。且つ坐禪を修するは獨

り曹洞宗のみにあらずして他の諸宗に於ても之を修せり、然れども諸宗の坐禪は證悟を得んか爲めに之を修するのみにて、一旦證悟を得たる上は用なしとて復た之を修せず、譬へは船筏を假りて江海を渡るが如くにて、一たび江海を渡りたる後は船筏に用なければ之を棄つるも妨なしとせり、之を習禪又は待悟禪と云ふ、然るに今大師の唱道し給ふ坐禪は此等の坐禪にあらず、故に其の期する所もとより迷を捨て悟を求むるにあらず、生死を離れて涅槃を欣ぶにあらず、善惡を思はず是非に管せず、有心に涉らす無心に墮せず、身心共に脱落して安樂自在の境に逍遙するの法なり、之を悟後の大用、證上の妙修と云ふ、是れ乃ち眞箇佛祖嫡傳の正坐禪にして、大師が天童如淨禪師より嫡傳し來りて始めて日本に弘通し給ひたる所なり。

吾人遠孫として大師の撰述に對し其の文章を議し奉るは最と畏きことなから、本篇は廣録十卷の中にも比類なき傑作にして、其の旨趣

は更なり抑揚頓挫聯絡照應より一句一字の排列に至るまで、極めて謹嚴整正にして宛轉自在毫も滯滞の迹なく、實に駢儷文の上乗にして六朝及ひ唐宋の高僧と雖も之に過ぐるを、故に參學の徒は獨りその旨趣のみならず、又作文の典範として拜讀して可なり。

原夫。道本圓通。爭假修證。宗乘自在。何費工夫。況乎全體。迥出塵埃。乎誰信拂拭之手段。大都。不離當處。乎豈用修行之脚頭者乎。

佛祖の經論は何れも序分、正宗分、流通分の三段に別れ居ることなるが今此の篇も亦同しく自ら三段に分れて「原夫」より以下「急務恁麼事」に至るまでは序分に屬せり。原夫は發端の辭にて元來といふ程の義、道は佛も衆生も月も花も俱に履踐する所の處、圓通は圓は欠ることなく餘ることなく完全備足したる貌すなはち道の跡に名けたる

詞、通の通達または融通など云ひて道の作用が十方三世に行き渡る貌、修證の修は修行なり證は證悟と熟字してサトリと訓す、工夫は思案工夫と熟字するが此にては骨折といふ程の義なり、扱天地の大道は本來坦然として十方に通達し縱横自在なれば佛菩薩も人間も牛馬も乃至一切衆生も共に常に履み行ふて少しも碍なきゆゑに殊更に修行をして之を悟ることを要せず。宗乗とは猶ほ宗旨と謂はんか、とくにて道と同意あり、古より今に至るまで山は突兀と高く海は渺漫と濶く松は直く棘は曲れる様即ち宗乗の脱體現成にして到る處自由自在なれば特に辛苦して之を求むることを須むず。次に「況乎全體より手段」に至るまでは故事あり、唐の神秀と云へる人曾て「身是菩提樹、心如明鏡臺、時々勤拂拭、勿使惹塵埃」との一偈を作られしに六祖慧能禪師其の韻を次きて「菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃」と作らしとあり今はこの故事に據られたり。ことの全

體の前の道といひ宗乘といふと意は同まゝ只詞のかはるのみ畢竟して吾人の本心を指すに過ぎず又修證と云ふも拂拭といふも意は一にて上の語の承け様にて詞のかはるあり。元來大道即ち吾人心性の全體は本來清淨にして無明煩惱妄想等の塵垢は一點も受けず靈々昭々曾て昧まざれば時々勤拂拭なといへる手段を用ひて之を拂ひ拭ふて淨むるの要あらんや。「大都」より「者乎」に至るまでは前二句と同意にてその全體は本來遠きにあらす直ちに人々の脚跟下を離れず立地の當處即ち脫體獨露なれば三到投子九至洞山といふか如き辛苦艱難して諸方に遍參脚行するの必要はあらすとあり。此の一段の要旨は大道は本より朗豁十方に圓通して往く處として些の隔碍なくろの全體は一點の染汚を蒙らず。故に本源より看來れば迷もなく悟もなく佛もなく衆生もなく煩惱も菩提もあく人々具足箇々圓成にして各自の光明蓋天蓋地なれば更に修行練磨の功

を要せずとあり。然れども此の本體に於て一念纒かに動すれば迷悟善惡一切の累立地に起ると次の段に移る。

然而毫釐有差。天地懸隔。違順纒起。紛然失心。

然而は上を抑へて下を起すの詞にてサウデハアレドモと云ふはとの義毫釐は何れも絲の織き貌にて極めて微細の形容詞違順の違は、タガフと訓じて心に叶はざるを云ひ順はシタガフと訓じて心に叶ふを云ふ紛然は絲の亂れて收むべからざる貌心は吾人の本心を云ふ。前段に於ては大道は本來圓通にして少しも障碍なく、本來清淨にして一點の塵垢を蒙らざれば特に修行練磨を要せずとの意を述たるものなるか此處は前段を一轉してその本來圓通なる大道に於て一步を誤れば遂に天と地との隔りを生じて容易に到る能はず、即ち本來清淨なる吾人の心性に於て一念わづかに動きて是非分別を

起すときは種々の妄想煩惱次第に起りて遂に本心を失ふに至ることを示す。扱一切衆生は本來圓滿具足にて一も欠ゆるところなく佛と同等にして、自分こそ知らぬ日々夜々大道の眞中に起臥往來して曾て一步も誤らざることゆる別段に工夫をして悟を開き修行をして佛となるなどの勞をなすに及ばざるわけなれども、一念の迷起るときは本心をとり失ひ、自分の脚下にふみしめて居る大道をわれど自ら踏み迷ふて遂に千里萬里の隔をなすに至る之を對面千里と云ふ。何故に斯くなるかと云ふに、本來清淨なれども根境の交渉と云ふて眼耳鼻舌身意の六根が色聲香味觸法の六境に對する上に於て彼の色は美ありとて之を愛し此の聲はあしとて之を憎むと云ふが如く、一たび取捨對待の見起るときは忽ち千百の妄想競ひ起りて本來の清淨心をかき亂し遂にとり失ふに至る。これは天地萬物と我とは元來別物にあらざるに自ら我の外に天地萬物ありと認め

て取捨憎愛の見を起して苦境に陥る之を事を執するの迷と云ふ。

直饒誇會豐悟兮。獲瞥地之智通。得道明心兮。舉衝天之志氣。雖逍遙於入頭之邊量。幾虧闕於出身之活路。

直饒は假に設けたる詞にてヨシヤと云ふ程の義、會は會得と熟字して合點といふ意、瞥地は過目なりと注してチラリといふほどの義、智通は會又は悟と同意なり、入頭之邊量の入頭は悟入又は入所と云ふと同じくサトリのこと、邊量は邊際と云ふと同じ意味にてキワ又はホトリと訓じ中央にあらざる義なり、出身之活路とは自由自在の境界を云ふ。前段は事を執するの迷を述べたるものなるが此處は理に契ふの悟を述ふ。一切の前境に對して取捨憎愛を起すは固より迷あれどもさればとてたゞひ我の外に一切の物なしと觀じて自ら十分の悟を開きたりと他に對して誇り、チラリと星ほどの合點をな

し、自ら大道を會得し、自己の心性を明たりと心得て、釋迦達磨もなんのそのと天をも衝かんばかりの威勢をなし、わづかに悟入のホトリに立ち到り、大手を揮て横行するも、未だ眞實自由自在の境界を得たるにはあらず。何故といふに、本來人々具足箇々圓成にして迷もなく悟もなく凡夫の聖人のといふ差別もなければ、迷ふべき理由も悟るべき理由もなき筈なり。然るに自ら物に執着して迷を起し、又これば迷ふたりとて更に悟を求むるは何れも本氣の沙汰にあらず。譬へば迷を捨て悟を求むるは水に溺るゝを恐れて火に投ずるが如くにて共に苦境に沈むなり、決して自由安樂の境界にあらず。故に此の苦境を脱せんとするには佛祖單傳ある坐禪を修せざるべからずと勸諭せらるゝなり、況して此の坐禪は釋迦達磨も共に修し給ひし所にして待悟の禪にあらず、佛道の正行として修すべきなれば、參學の徒は暫時も之を怠るべからずと次の段に移る。

十

矧彼祇園之爲生知否。端坐六年之蹤跡可見。少林之傳心印。面壁九歲之聲名尙聞。古聖既然。今人盍辨。

矧どの比較の詞にてマシテと云ふ義、彼はアノと云ふほどの義なり、祇園は委くは祇樹給孤獨園精舍と云ひ、畧して祇園精舍と云ふ、即ち釋尊の會て印度舍衛國にて説法教化なし給ひたる道場の名なり、生知論語に「生而知之者上」とありて聖人のことなるを、今は釋尊の生れあがらにきて無師智、自然智を具し給ひたる大聖人なるを云ふ、端坐は正身端坐と熟字して坐禪のこと、蹤跡はアトカタなり、少林は支那の嵩岳にある少林山のことにて達磨大師九年の間坐禪なし給ひし處なり、傳心印とは佛祖嫡傳の大法を傳ふと云ふほどの義、面壁は壁に向て坐禪することあり、聲名は猶ほ評判と謂はんがごとし、古聖は昔の聖人と云ふことにて釋尊と達磨大師とを指す、既然とは皆坐禪

を行ひ給ひしことを云ふ、今人盡辨とは今時の人々は何故に坐禪を修せぬなどの意あり。前段は元來迷悟と云ふものさき筈なれば縦令悟を開きたりとして猶ほ迷たるを免れざるゆゑに未だ眞實安樂の境界に至らざることを述べて、暗に坐禪を修して自由の道を求むべきことを示されたるが、此處は更に一步を進め坐禪は常に尋常人の修すべきのみならず、佛祖聖人すら之を行ひ給ひしことなれば後世の吾人は是非ともに修せざるべからざることを示さる。一段の文意は前を承けてこれのみならず坐禪は彼の祇園精舎にて説法教化をなされたる大聖釋尊も六年の間正身端坐して之を行ひ給ひ其の跡方今日に存して見ることを得べく、又釋尊より廿八代の嫡嗣として印度より支那に來りて眞箇の佛法を傳へ給ひたる達磨大師も九年の間少林山に在りて面壁坐禪を行ひ給ひしことありて其の評判は今日まで傳はりて人々のよく知るところなり斯の如く古への聖人

すら之を修し給ひたれば今時の吾人兒孫たる者にしていかで之を修せざるべきとの意なり。此處に斯く勸諭せらるるよ、以所は蓋し佛祖正傳の坐禪は所謂悟を得んが爲めの媒にわらず、即ち悟後の大用、證上の妙修にして之を修するに際限なく事々物々に之を修し、出息入息に之を修し、行往坐臥に之を修し、乃至生々世々之を修して其の終極なきの王三昧なるを以て三世の諸佛歴代の祖師皆之を修し給ひたれば今日の吾人たる者亦之を修せざるべからざればあり、

所以須休尋言逐語之解行、須學回光返照之退步、身心自然脫落、本來面目現前、欲得恁麼事、急務恁麼事。

所以はユエニと訓す、尋言逐語之解行とは總べて他人の言句に就き推量して種々の分別見解を立つるを云ふ、回光返照之退歩とは退いて内に反求するを云ふ、即ち前境に對して事々物々を見聞する上に

於て彼の聲は美なりと聞き此色は醜なりと見る底のものは果して何物ぞと自己に顧るを云ふなり、身心自然脱落とは迷悟凡聖是非善惡と云ふが如き塵垢の衣服をスツカリと脱ぎ捨て、少しも束縛を受けず自由自在清淨潔白なる丸裸となりたる境界を云ふ本來面目。現前とは身心脱落の當相にて即ち所謂本來圓通自在の大道に達し不迷不悟の本體に立ち歸ると云ふ欲得。恁麼事。急務。恁麼事。とは恁麼は如是の義にて即ち身心脱落本來面目現前を得んと思はゞ尋言逐語を休めて回光返照之退歩を學ぶべしとの意なり。佛道を學ぶに當りて假令佛祖の經論たりとも徒らにるの言句文字の跡を追ひまはりて知解分別を逞ふするは大なる病にして、一切の妄想煩惱は皆これより生じ、之れが爲めに遂に邪見の坑に墮するなり。故に徒らに他人の糟粕を逐ふことをやめ、退て之を己れに求め、即ち目前の高境を追ふところの自心は畢竟如何と穿鑿せば、これと云て自心の實

体は遂に得べからずして畢竟空なることを知るべし、一切の前境はもとより善惡の自性なきものにして、善惡は皆自心の妄分別より生ずるものなれば、今自心の無自性不可得なることを知る上は前境も亦た畢竟空あることを悟るべし、これを人境雙亡と謂ふ。此に至りて身心自然脱落本來面目現前の境界を得る、是れ學道の所詮なり。故に此の境界を得んと欲せば他人の言句を逐ふことをやめて速に佛祖正傳の坐禪を修すべしと勸諭あるなり。「夫道本圓通」より此に至る迄の序分に屬し以下は正宗分即ち本文に入る。

夫參禪者。靜室宜焉。飲食節矣。放捨諸緣。休息萬事。不思善惡。莫管是非。停心意識之運轉。止念想觀之測量。莫圖作佛。豈拘坐臥乎。

是れより以下須臾即失に至るまでは正宗分即ち本文に屬す。夫は

前に解したると同じく發端の詞にてサテと云ふは此の義。參禪は坐禪のことなり。靜室とは閑靜なる居處なり。諸縁は萬事と同意。心意識は第六第七第八の三に配當し下の念。想觀に對て説くことなどもあれども今はさまで立ち入るに及ばず。前にも述べし如く全篇駢儷體なれば對句の都合にて文字を重ねたる處頗る多くして、此處の心意識と念想觀と對したるが如きも敎家の判釋の如くに解するを要せず。停心意識之運轉止念想觀之測量の十四字にて一切の思慮分別を斷つことと會得すべし。莫圖作佛とは佛にならんと思ふなかれとあり。豈拘坐臥乎とは坐禪は唯だ默坐のみと限るべからず。行住坐臥の上に於て常に坐禪を修して須臾も離るべからざるの謂なり。サテ坐禪をなすには騒しき處にては兎角に心の散り易きものゆゑに靜閑なる室をよしとす。次に飲食を節して適度になさざれば兎角に身を傷ふを以て其度を定めて身の健康を保つべし。次に坐禪の

時は一切の物事を悉く抛擲してとりあはず、一切の善惡是非を思はず一切の思慮分別を斷つべし、只そのみならず佛にならんとも求む可らず、又坐禪は唯だ手足を組み無言にて坐するのみと思ふべからず、臥るも起るも七顛八倒の中も悉く坐禪を離れざるよふに修せよとあり。善惡を思はず是非を管することなく心意識の運轉をやめ念想觀の測量をやめとあれど、是れ固より枯木頑石の無知無覺と同様に非ず、心意識念想觀の作用を借らずしてよく一切の事を辨じて之をなすの謂にて、二乗聲聞の灰心滅智とは雲泥の差あり。又斯く無念無想になりて佛になるとを求むるにもあらず、何故といふに元來佛の衆生のとの區別あらざれば佛となるべきよふなければなり。是れ佛祖正傳の坐禪の所謂待悟禪にあらざる所なれば能く能く心すへし。又既に坐禪と謂ひなから豈拘坐臥乎とあるは奇あるか如くあるも是れ又他家の唱ふる所と異なる點なり。若し唯だ兀

坐のみを以て坐禪となさば二乘聲聞の見到墮す、永嘉大師も「行亦禪坐亦禪、語默動靜體安然」と云はれて、朝より暮に至るまで運水搬柴喫茶喫飯の上に於て毫も大寂定を起たす毫も大寂定を起たすして能く一切萬事をなす是れ眞の活坐禪なり。故に眞正の坐禪は決して其外相にあらざれば外相の如何に拘らず其神旨を會して活潑々地の眞禪を修すべし。

尋常坐處厚敷坐物上用蒲團。或結跏趺坐。或半跏趺坐。謂結跏趺坐。先以右足安左膝上。左足安右膝上。半跏趺坐。但以左足壓右膝矣。寬繫衣帶。可令齊整。次右手安左足上。左掌安右掌上。兩大拇指面相拄矣。乃正身端坐。不得左側右傾。前躬後仰。要令耳與肩對。鼻與臍對。舌掛上腭。唇齒相着。目須常開。鼻息微通。身相既調。欠氣一息。左右搖振。兀兀坐。

定思量箇不思量底。不思量底如何思量。非思量。此乃坐禪之要術也。

是れ正しく坐禪の儀式作法并に用心を示す、平常坐禪をなすには坐物といひて「圓坐」の類を敷き其上に蒲團を敷きて坐するなり、坐物を敷くは樹下石上又ハ板の床の上に坐する時に用ゆ、疊の上には用ゆるを要せず、蒲團は夜具又は坐蒲團のとに非ず、今時「坐蒲」といふものゝことなり、跏趺坐は足を交て坐するの義なり、坐禪に二種あり一を結跏趺坐と云ひ一を半跏趺坐と云ふ、結跏趺坐は先つ右の足を左の膝の上に置き次に左の足を右の膝の上にのせて互に組み合せるなり、半跏趺坐は唯た左の足を右の膝の上にのせるなり、結跏趺坐にても半跏趺坐にても足を組みたるのちゆるやかに衣をもて正しく掩ふべし、次に左の足の上に左右の掌を仰ぎ重ねてのせ、左の拇と右の

拇と向ひ合せて相挂へその中に一の雞卵を容るべきほどになすな
 り、かくて左の方にかたより或は右の方に傾き或は前にくいまり又
 は後に仰むくとなく耳と肩と相對し鼻と臍と相對せしむ、是れ正身
 端坐の當相なり、舌は上の脣にかけ唇と齒とは密着せしめ、目は常に
 開き、鼻息は微かに通せしむべし、是のごとく身相を整ひのち、先づ口
 を張りて氣息を開通し、身體を左右にふり、自然に直坐の當相に復し、
 兀々と不動着に坐する之を正坐儀と云ふ。斯く坐定して何事をな
 すかといふに、悟を開かんとするにあらず、又佛となるを求むるにわ
 らず、只思量底を思量するなり、思量底を如何にして思量すへ
 きぞといふに、只た是れ非思量なり、さてるの非思量とは決して物事
 を思はざるの謂にはあらず、「不能語」にも「思量之現前、直下非矣、非
 不者、不言除却、即是思量之眞實體也」とありて、思量の當躰がとりもな
 はさずそのまゝ、思量なるの謂なり、故に非思量の三字は前の身心

脱落本來面目現前を得るの直路にして實に坐禪の要術なれば能く
 く、實究すべし。苟も此の三字を體得することを得ば坐禪儀一篇
 の主意は悉く了解するを得べく、亦參學の能事畢ると謂ふも不可な
 し。

所謂坐禪非習禪、唯是安樂之法門也。究盡菩提之修證也。
 公案見成、羅籠未到、若得此意、如龍得水、似虎靠山、當知正
 法自現前、昏散先撲落。

所謂は指す所あるの詞にて、即ち今勸諭ある所の佛祖單傳の坐禪を
 指すあり、習禪は前にも聊か辨じたるが如く、小乘禪に屬し、諸種の觀
 念を修して證悟を得るの禪にて、修證不二と謂へる高尚の禪にあら
 ず、究盡とは究はキハメル盡はツクスと訓す、菩提は梵語にて道と翻
 譯す、修證は修行證悟と熟語する、此處にては修行と證悟とを別々

にするの義に非ず修證不二にして修即證證即修の義なるを法門と謂ふと畧ぼ同じ公案は公府の案牘といへることにて政府が天下の正邪曲直を斷ずる所の法律とも謂ふべきものなるが此處にては佛祖の定法といふほどの義あり見成は猶ほ現成と謂はんがごとくにて其の公案がアラハルと謂ふほどの義なり羅籠の羅はアミ籠はカゴのことにて身心を束縛して自由ならしめざる煩惱妄想等を謂ふ未到はこれまでは來らねども將來は到るも測り難きとの意なればとて「問解」には未到となしてイタルコトナシと訓してあれど面山の此の説は從ひ難し何故といふに大師は未の字を不と同様に御用ひありしこと諸書に見ゆ近くは「大清規」等にも見ゆたれば矢張「未到」にて不到の意に解しイタラズとの義と心得べし得此意はこの通になればと謂ふほどの義なり如龍得水似虎靠山とは龍は神靈なれども水を得ざれば其の靈を顯はすこと能はず虎は猛獸なれども山に靠

らざれば其の威を振ふ能はず今は龍の水を得虎の山に靠るが如くなれば自由自在にて毫も屈することなきに喩ふ昏散の昏は昏沈の病といひて心氣沈みこみて一點の活氣なき死漢を云ひ散は散亂の病といひて心猿意馬外物を逐ふて驅走し念々變易遷流して曾て止まらざる狂躁者を云ふ撲落とは脱落と云ふと同じくモスケルと云ふ義なり。此の一段は佛祖單傳の坐禪は小乗の習禪に異なり且つ其の効用の廣大なるを示す。サテ今勸むる所の坐禪は小乗の習禪にはあらずして只た身心脱落の境界に至り迷悟得失等の懸縛を離れて大自在大安樂を得るの法なり言を換へて謂へば佛道を得るの修行なり且つ證悟あり而して單に修行と謂はずして修證とあるは大師の卓見に出でたる所にして此の坐禪を行へばとりもあはさず其の儘が佛道を得るの修行にしてるの修行が頓て證悟なれば所謂修中の證々中の修にして修證同時の法門なり。左れば此の坐禪を

修する時は直に三世十方の佛祖と手を把りて同行し一切萬物と共に起臥し些のさばりなく、一擧手一投足の上毫釐も煩惱妄想的の爲めに束縛を受くることなく、恰も龍の水を得、虎の山によるが如く、大自在の境界に至る、此の時に至らば所謂佛祖の正法現前して、昏沈散亂などの病は疾くに脱落して本來清淨の體となり、盡天盡地獨立無伴の活機用をあらはすことを得、その効用は實に廣大無邊にして只不可思議と謂ふの外なし。

若從坐起徐徐動身安詳而起不應卒暴

徐々とはユルヤカの形容詞、安詳も輕卒粗暴ならざることにて進退坐作のシトヤカなるを云ふ。此の一段は前の「兀々坐定」の次にあると心得べし、前の「兀々坐定」までは坐禪の儀式を示し「思量箇不思量底」より「坐禪之要術也」までは坐禪の用心を示し、前段は坐禪の性質と其

の効用を示されたるものなるが、此處は復た前にかへりて坐禪の儀式即ち抽解と云ひて跏趺坐を解きて起つ時のさまを示すなり。跏趺坐をなす時は前に示したる如くなるがサテ又跏趺坐をどきて坐禪より起つ時にはソロソロと身を動しシトヤカに起つべし、決して輕卒粗暴の振舞をなし衣袖の隣席の人に打ちかゝり、又は足音たかく他の心念を亂すが如きことなきやうにすべしとあり。是れは諸經文にも「安詳而起」の言ありて三世の佛祖皆行ひ給ひし所あればよく心すべきなり。

嘗觀超凡越聖坐脫立亡一在此力矣。況復拈指竿鍼錐之轉機、擧拂拳棒喝之證契、未是思量分別之所能解也。豈爲神通修證之所能知也。可爲聲色之外威儀、那非知見之前軌則者歟。

嘗觀とは古來より傳記等に載録してあるを見て心得居るといふこと、超凡越聖とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上これを六凡と謂ひ聲聞緣覺菩薩佛界これを四聖といふがその六凡四聖を超越して凡とも聖とも名つくべきあき人を云ふ坐脱立亡の坐脱は端坐しながら逝去すること立亡は直立しながら涅槃に入るを云ふ一任此力とは坐禪の力によるといふこと况復はるの上に又といふほどの義拈指竿鍼鎚之轉機の轉機は機用といふも同じくハタラキのことにて古來歴代の佛祖が或は指頭を豎て或は竿木を弄し或は鍼を把り或は鎚を拈じて人々を接得し其の安心立命を得せしめられたる活機用を云ふ舉拂拳棒喝之證契の證契とはサトリのことにて古佛曩祖が拂子を豎て拳頭を弄し棒を行し喝を放ちなぞして人々に佛法を證契せしめられたることを云ふ聲色之外威儀知見之前軌則とは共に意識作用を離れたる一種不可思議の活機用を云ふ。此の一段も亦た

坐禪の効用を解き大自在の活三昧を得ることは口耳の學によらずして全く坐禪の力によることを示す。古より三世十方の佛祖が凡聖の格式を超越したる境界に立ち至り安心立命の地を得生死の大事に臨みて從容として迫らず或は端坐して逝去し或は直立して涅槃に入られしが如きは皆此の坐禪を修せられたるに由る且つまた指竿鍼鎚等を拈し或は拂拳棒喝等を弄して大法の的意を示し人々の迷を轉じて悟を開かしめ安心立命を得せしめられたる活機用も決して思量分別を以て了解すること能はず又神通變化やその他の修行力にてなし得ることにあらず。何故といふに知見解會即ち意識作用にあらずして全く意識外の作用あればなり。而してその意識外の作用は坐禪を修し非思量の境界に至らざれば爲す能はず要するに佛道の極致に達し眞箇の安心立命を得て自由安樂の境界に逍遙し無碍の妙用を作すには必ず口耳の學を休めて專一に坐禪を修

せざるべからざることを勸諭あるあり。

然則不論上智下愚莫簡利人鈍者專一工夫正是辨道修證自不染汚趣向更是平常者也。

然則は前を承けて下を起す、簡は甄別することにて不論と同意あり、工夫は前にもありしが此處も只管坐禪を修することを云ふ、正是は即是といふも同じ、辨道は成辨佛道を約したる詞にて佛道を辨へ得ると云ふほどの義なり、修證自不染汚は南嶽懷讓禪師の「修證即不無染汚即不得」の語に據られたるものにて染汚はソミケガルと訓じて修行と證悟とを區別し修行を積みたる結果にて證悟を得るものと心得て修行するときには修證ともにそみけがれて清淨なることを得ず依て修證はあれどもろの修證は少しもけられることなしと云われしなり、今はろの修證が自然に染汚せずとありて我れよりもとめ

ずとも自然に染汚するとおしとなり、趣向更是平常者也、古語を翻用せられたるなり、趙州問南泉如何是道、泉曰、平常心是道、州曰、還可趣向否、泉曰、擬向即乖、州曰、不擬如何、知是道、泉曰、道不屬知、不知、知是妄覺、不知、是無記、此意は吾人平常の心がとりもなほさす大道なりされど、知不知の兩頭に墜せざるゆゑ、僅にても分別心を起してろの大道に向て趣かんとすれば、忽ち方角をとり失ふて大道の真中に出つること能はずといふことあるが、此處にてはそれを翻用してその趣向する所が平常にして少しも道に違はぬとなり。此の一段は特に表題の普勸の意の存する所なり。前段に坐禪の力は思量分別神通修證の及ぶ能はざる所にて固より意識の作用にては到底無邊の大用をなす能はずとあるを承けて、されば此の參禪を修するには上智下愚を問ふに及ばず、又性質の利鈍を問ふにも及ばず、何人にも差問なく、只一意專心に坐禪をなして少しも餘念に涉らざるべきそれがろ

のまゝ佛道を得るといふものにて、斯く專一に坐禪を修してゆくときは修證自らその間に現はれて而も少しもけがるゝことなく、朝より暮に至るまで一舉手一投足が一々大道に違ふことなくして自由自在あり。大師の御詠に「水鳥のゆくもかへるも跡たえてされども道はわすれざりけり」とあるは實に此の修證不染汚、趣向平常の意を示されたるものなり。

凡夫。自界他方。西天東地。等持佛印。一擅宗風。唯務打坐。被礙元地。雖謂萬別千差。祇管參禪辨道。

自界他方とは三千大千世界といへることありて吾人の現在住する所の此の娑婆世界を自界といひるの他の多くの世界を指して他方世界といふ、西天東地とは天竺即ち印度は支那の西方に當るを以て西天といふ、又支那は印度より東方に當るを以て東地いふ、此處にて

自界他方といひ西天東地といふは單に土地を指したるにはあらず、自界に出現し給ひたる釋尊若くは他方世界に出現し給ひたる諸佛又印度支那等に出世し給ひたる歷代の佛祖を指す、故に自界他方西天東地の八字にて十方三世の諸佛諸祖といふ程の意なり、等持佛印の等は齊と同じく一樣にといふ等持は護持と熟字して守護し維持すること佛印は諸佛法印の約語にて佛法といふ程の義なり、一擅宗風とは自由に宗風を擧揚すること、打坐は坐禪なり、被礙元地の元地は前にありし元々と同じことにて不動の貌、被礙は常につきまどふて邪魔にあるの義にて日夜元々と坐定して須臾も坐禪を捨てざるを云ふ萬別千差とは佛教に八萬四千の法門あればるれらを指していふ、參禮辨道は坐禪のことなり。此の一段は古來の佛祖皆此の坐禪を修して佛法を護持し給ひたれば參學の徒は只此の坐禪を專一に修すべきを述べ。十方三世の諸佛諸祖の一樣に佛法を守護し維

持して各自宗風を自由に擧揚せられたるは外の力にてはあらずして、唯此の坐禪を修し日夜暫くも捨てられざるに由るされば、佛教に八萬四千の法門なほいひて種々の法門はあるべけれども、只此の坐禪の一事のみを修して日夜怠らざれば、これにて足ることゆゑに、參學の徒は爾餘の行業を顧みずして專一に此の一行を修すへしと勸諭あるなり。

何^{ナニ}抛^{ナゲ}却^{シテ}自家之坐牀^ニ。謾^ニ去^リ來^ニ他國之塵境^ニ。若^シ錯^レ一步^ヲ。當^ニ面^ニ蹉^ス過^シ。既^ニ得^ニ人身之機要^ヲ。莫^ク虛^ク度^ク光陰^ヲ。保^シ任^ス佛道之要機^ヲ。誰^レ浪^リ樂^ム石火^ノ加^フ之^ヲ。形質^ハ如^シ草露^ノ。運命^ハ似^シ電光^ノ。倏^ト忽^ト便^ニ空^ニ。須臾^ハ即^チ失^ス。

抛却は打ち捨てるといふこと、去來は彷徨と同じ義なり、塵境は六塵六境の畧語なり、「何抛却」より「塵境」に至るまでの二句は法華經信解品の文意に據りて述べられたり。信解品の文意は或る長者の一子が

不圖親の家を脱け出て乞食となりて多年の間諸國に流浪しめぐり廻りて遂に己が家に歸り父の諭によりて始めて其の身の疾くより長者の一子にて富貴の境界にてありしことを悟りしといふ譬喩を以て、一切衆生は本來佛陀と同等の智慧徳相を具有しながら只一念の迷より妄想煩惱を増長し種々の罪業を作り六道の間に輪廻して自ら淺間し境界に陥り居れども、本來佛陀と同等なれば一旦我れは佛陀と同等なりと悟るときは其の身のまゝ、佛陀の境界なることを示したるものなるが此處は只專一に佛祖正傳の坐禪を行ひ回光返照の退歩を修せばとりもあはさず佛祖の位置に安住するゆゑに、恰も長者の七寶の牀に坐し居るが如きものなれば謾りに六塵の外界を追ひ憎愛分別を逞ふして邪見の岐に彷徨ひ乞食の如き淺ましき境界に陥るなかれとなり、若錯一步當面蹉過の當面は對面と同じ、蹉過はフミチガフといふこと、二句の意は前の「毫釐有差天地懸隔」

と略同し、人身之機要、佛道之要機の機要々機は何れも肝要といふほどの義なるが此處は共にスグレ、又はマサルと云ふほどの意なり、石火は燈石の中より出づる火のことにて浮世の樂の忽ち消え失せるに喩ふ、加之はマシテといふほどの意形質は身軀を云ふ、運命は一期の運と壽命とを云ふ、草露電光は何れも石火と同じ意、倏忽須臾は共に草露電光を解釋したる詞にてろの極めて迅速に消失するを云ふ。此の一段の中「何抛却」より「當面蹉過」に至るまでは坐禪の用意を示し、以下は餘事を願はずして速に坐禪を修むべきを勸諭あるなり。サテ自家の坐牀といひ他國の塵境といふも固より別處あるにあらず、只此の王三昧を修し自己の脚下に向て返照せば到る處皆自家の坐牀に安住するなり。然るを若し此の不染汚の正行を修せず、外境を追ふて馳走せば是れ他國の塵境に逍遙ふなり。僅に一步を踏み誤れば圓通自在ある面前の大道をふみはずして千里萬里の隔となる故

に能く之を慎むべし。一切衆生の中にて諸種の惡道に生るゝものは極めて多く人間に生るゝものは極めて少く例へば大地の土と一指爪の上とのせたる土ほどの相違ありとのことなるが、今吾人は幸に一切衆生の中に於て最も勝れたる人身を受け、諸道の中に於て最も勝れたる佛法に遇ふたることなれば徒らに石火の如き浮世の樂に耽りて空しく光陰を送ることなく一心に修行すべし。マシテ吾人の此の軀は恰も草葉の上の露の如く運命は電光の如くにて瞬く間に消失す。大師の御詠に「世の中は何に喩へん水鳥の嘴ふる露に宿る月影」とある如く、實に無常迅速持み難きものなれば速に萬事を抛ちて一心に坐禪辨道すべしとなり。正宗分は此の一段にて了る以下流通分に入る。

冀夫參學高流。久習摸象。勿怪真龍精進直指端的之道。尊

貴。絶學無爲之人。合沓。佛佛之菩提。嫡嗣。祖祖之三昧。久爲。恁麼。須是恁麼。寶藏自開。受用如意。

冀夫は希望の詞にて下の「須是恁麼」までかゝる。參學高流とは學道の人々を尊敬したる詞。摸象とは印度の鏡面大王と云へる人曾て彫の盲者を集めて象を摸でしめけるに象の足を持ちたる者は象は漆桶の如しと答へ尾を持ちたる者は掃帚の如しと云ひ其の他種々の答をなせしが、皆各自ら持ちたる部分のみに就て想像を下せしことなれば一も當らざりしといふことあり此處にては徒らに佛祖經論の一部分に拘泥して佛道の全體を知らざるものに喩ふ怪眞龍とは支那の葉公といふ人日頃龍を愛しこれを畫き又は彫みなどして樂み居けるが一日眞の龍牖よりあらはれ來りければ驚きて魂を失ひしといふことあり此處にては佛法と云へる假名のみを愛し却て眞實

の佛法を疑ふものに喩ふ精進は勉強のこと直指は直指人身見性成佛の略語、端的はマツソノ處、マツソノ時といふほどの意、直指端的の道にて多岐方便に涉らざる單刀直入の捷路と云ふほどの義なり、絶學無爲之人は知識分別を離れ所謂非思量の境界にある人を云ふ、合沓は函と蓋と相合することにて合同又は契合と云はんが如し、菩提は道なり、嫡嗣は嫡子より嫡子に相續することにて正傳を云ふ、三昧は梵語にて正受又は正定と譯し坐禪のことなるが上の菩提に對したるまでにて同意なり、恁麼は如是なり、「久爲恁麼」は上の數句を承け「須是恁麼」は下の二句を指す受用は使用と同じ、寶藏自開受用如意とは佛祖の大道に契合し自己の心地を明ひれば自由安樂の境界に達するとを長者の藏を開きて財寶を心の儘に使用するに譬へて云ふ。此一段は第三の流通分に属す、流通とは弘通といふに同じ、佛祖正傳の坐禪の普く世に行はれんことを望み普勸の意を結ぶ。蓋し大師

の時に當りて多くの佛者正法眼を具せず皆經論の一部に拘泥し自
己の臆側を以て佛法を判斷するのみにて佛法の全體を知らず恰も
盲者の象を摸するか如し。又大師以前より傳れる禪あれど是れ皆
佛祖の嫡傳にあらす然るに之を珍重して嫡傳の禪を疑ふは葉公の
畫彫の龍を愛して却て真龍を怪むが如し。故に從來摸象の習慣に
なづかず葉公の如く偽を愛して眞を疑ふことなく一超直入の捷路
に就て奮勵し、絕學無爲の人即ち歷代の佛祖を尊重してその相傳の
坐禪を修し佛祖の大道に契合すへし。多年の間是の如くするときは
は自己心地の寶藏自然に開けて大安樂の境界に達するを得へしと
懇切に勸諭あるなり。

普勸座禪儀講義終

明治二十九年四月三十日印刷
明治二十九年五月十日出版

定價金三十錢

著述者 山田孝道

發行者 田原豐吉

東京市神田區駿河臺
西紅梅町十二番地

印刷者 三島宇一郎

東京市神田區表神保
町二番地

發行所 光融館

東京市神田區駿河臺
西紅梅町十二番地



大 賣 捌 所

- | | |
|------------------|--------|
| 東京市牛込區神樂町一丁目六番地 | 益友社 |
| 全 芝區露月町一丁目十八番地 | 鴻盟社 |
| 全 麻布區飯倉五丁目 | 森江佐七 |
| 京都市三條通高倉東エ入 | 出雲寺文次郎 |
| 大阪市東區南本町四丁目心齋橋筋角 | 金尾佛書店 |
| 全 市安土町四丁目 | 積善館 |
| 名古屋市門前町 | 其中堂 |
| 新潟市本町通七番町 | 櫻井書店 |
| 岐阜市鞠屋町 | 水谷善七 |
| 福井市佐佳枝中町 | 品川書店 |
| 全 市全 町 | 日新館 |
| 熊本市新町二丁目 | 長崎次郎 |
| 其他 各 國 書 店 | |

光融館發行書籍及雜誌目錄

佛教通俗講義

完 初號より缺本なし當分の内何號にても何冊にても御需に應ず後日ハ全部揃の外貴需に應せず但某科を分本にしての貴需は御断申上候●一冊郵税共金九錢●十冊同八十五錢●二十冊同壹圓六十錢三十冊同二圓三十錢●郵券代用一割増

○全部六十冊(各科に總目次)定價郵送料共金四圓三十錢

○全部購求者にして分本製本御望の方は拾五冊の製本料九十錢増送ありたし(全部十五冊に分ち表紙を附す)

- | | | | | | | |
|--------|------|--------|------|--------|------|-----|
| 維摩經 | 島地默雷 | 大乘起信論 | 義記 | 織田得能 | 寶鏡三昧 | 釋宗演 |
| 八宗綱要 | 織田得能 | 因明學 | 村上專精 | 正信偈 | 前田慧雲 | |
| 碧巖集 | 大内青巒 | 七十五法名目 | 織田得能 | 菩提心論 | 姬宮大圓 | |
| 卅三過本作法 | 藤原雅壽 | 俱舍宗大意 | 齋藤唯信 | 般若心經 | 大内青巒 | |
| 華嚴學 | 藤谷遠由 | 佛說法滅盡經 | 大内青巒 | 鴻仰要路 | 江村秀山 | |
| 原人論 | 大内青巒 | 十支談 | 高田道見 | 大乘止觀頌 | 釋清潭 | |
| 天台西谷名目 | 大内青巒 | 三十唯識論 | 齋藤唯信 | 宏智頌古一則 | 大内青巒 | |
| 梵文阿彌陀經 | 南條文雄 | 佛敎大意 | 織田得能 | 質問解答 | 各講師 | |
- 第一號以下再版
 本講義ハ明治廿六年八月初刊以來宗教家ハ勿論殊ニ世間有志ノ人々ニ愛讀セラレ各號ヲ印刷スル毎ニ非常ニ部數ヲ増刊スルニモ關ハラス前記ノ通り再版ニ再版ヲ重メ

ルニ至リタルハ本館ノ竊ニ道ノ爲メニ喜フ所ナリ從來世間ニ佛教講議録ナルモノナ
 キニアラサルモ總テ専門學者ノ僧侶ノ爲メニセシモノナレハ俗人ニハ了解シ易カラ
 ス今本講義ハ此弊ヲ矯メ現今我國ニ於テ博學高德ニシテ特ニ文筆ニ長セラレ、屈指
 ノ高僧諸師ニ請ヒ務メテ普通ノ文辭ヲ以テ玄妙深遠ナル佛教ノ奧義ヲ極メテ平易ニ
 詳解ヲ施シ術語ニ假名ヲ付ケタレハ通常ノ新聞雜誌ヲ讀ミ得ル者ニハ何人ニモ了解
 スルヲ得ルハ本講義ノ特長ナリ數千年間我國ノ人心ヲ支配シ來リタル佛教ノ眞味ヲ
 知ラント欲スルモノ請フ本誌ニ就テ之ヲ研究セヨ

佛教大家論集

全部十二冊 每輯百二十頁 ●一冊定價郵稅共
 十二錢 ●全部十二冊一度ニ御注
 文ノ方ヘハ特別ヲ以テ郵稅共一
 圓三十錢

本邦各宗ノ諸大家ノ有益貴重ナル論說ハ人々ノ必ス見ルヲ庶フ所ナリ而ルニ多クハ
 零簡斷冊ノ裡ニ散在シテ容易ニ得ル能ハス且ツ年數ヲ經ルニ從ヒ漸ク將ニ埋沒盡滅
 セントス今此編ハ是等零簡斷冊中ヨリ空前絶後ノ眞價アル傑文ヲ摺拾收集シ明治廿
 七年一月ヲ以テ第一輯ヲ發刊シ同年十二月ヲ以テ第十二輯ヲ發刊シ以テ此佛教界ノ
 一大寶典ヲ完結スルノ責任ヲ完フセリ之レ學者ノ希望ヲ満足セシメ且大家諸ノ恩惠
 ナ永遠ニ傳ヘントスルノ微衷ニ出ツ其宗派ノ別ノ如キハ素ヨリ論セサルナリ

再版 第一輯 目次

萬物靈	長島地默雷	偶	德	說原	坦山	三世	因果	說赤松連城
道德を挽回する策	吉谷覺壽	道	德	論釋	雲照	我見ヲ亡スルニ在リ	島地默雷	
苦樂何處ヨリ來ル	大内青樹	或人ノ質問ニ答フ	高志	大了	信	佛	論佐々木東洋	
鐵勢之	說山岡鐵舟	佛教興廢ノ蹟	鐵田	得能	信	佛	論佐々木東洋	
平常	說大内青樹	自由	宗	教渥美	契縁	公案	辨今北洪川	
世界ヲシテ悉ク僧タラ	神原精二	語	默	說島地默雷	萬法	相關ノ理	德永浦之	
淨土不違	說水谷仁海	脫白	靈	現高田	道見	人	權論(一、二)	島尾得庵
鐵寒窓放言四則	虞淵老人	佛法トハ心ノ法ナリ	荻野	獨園				

第二輯 目次

自愛	論島地默雷	教相家ト禪學者	福田	行誠	禪教	同體	論高田	道見
佛法孝	論釋宗演	佛	教	眞理	渥美	契縁	進	德朗
宗教に排斥性涵容性の	赤松連城	鐵寒窓放言(八則)	虞淵	老人	山	家	出	世大内青樹
方便ノ	解島尾得庵	佛	教	攝	要山岡	鐵舟	三世	因果
五福ノ	說秋月橋門	萬物の活動は二にして	神原	精二	對	同	一	則釋照
佛法興起	論川合清丸	宗	弊	論原	坦山	萬法	唯心	說島地默雷
山岡鐵舟居士傳	荻野獨園	無常	說大内	青樹	教學ノ別	ヲ論	又鐵田	得能

第三輯 目次

修行要旨原 坦山 國土トハ何ゾ鳥尾得庵 報恩 義意島地默雷
 神道 辨川合清丸 悲智 雙行ノ 說渥美契縁 一字ノ 寶瀧谷系宗
 方便 說大内青樹 時ノ 說島地默雷 佛 教 眞 理南條文雄
 迷悟ノ 四句織田得能 樂 土 論 德永滿之 ユニテリアンと佛教を比較ス 中西牛耶
 人身 難 得神谷大周 智力は有限なるヲ無限 村上專精 殺生 罪否 論吉谷覺齋
 佛教 大勢 論堀内游宇 讀日本西教史有誤釋 雲照 束 縛 ノ 說楠 潜龍
 因果法爾ノ 說吉谷覺齋 歲寒窓放言(二則) 庚洲老人 六道輪廻ノ 說赤松連城

第四輯 目次

教 原原 坦山 一世教と三世教高田道見 眞宗 大意略說赤松連城
 新 論 論大内青樹 酒 誠 贊 語島地默雷 因 縁 和 合南條文雄
 宗 教 論 論德永滿之心 の 本 體原 坦山 機關と理致との深淺高田道見
 宗 教 の 本 領 東 惠 仁 釋氏とア一氏との問答東海玄虎 一 統 教鈴木券太郎
 感 應 道 交 論 前 田 慧 雲 塵 外 對 話 釋 雲 照 藤 原 氏 の 佛 法 大 内 青 樹
 本 末 の 說 石 村 貞 一 道徳は反て卑近の實踐 澤柳政太郎 貴ぶ
 行 道 進 德南條文雄 善の最大なる者高田道見 理論や實際實際や理論村上專精
 佛 遺 教 經 の 論 澤 柳 政 太 郎 先 入 爲 主 島 地 默 雷 通 誠 偽 福 田 行 談
 解 行 兩 德 の 說 織 田 得 能 疑 問 加 藤 熊 一 郎 不 易 の 理 原 坦 山

第五輯 目次

公平なるは佛教山本貫通 性遮二戒の辨辻 顯高 心 小泉了諦
 宗 教 と 社 會 赤 松 連 城 厭 世 教 の 必 要 井 上 圓 了 禪宗の道徳と眞宗の道 前田慧雲
 西 方 大 内 青 樹 洗 除 心 垢南條文雄 知足安分と進取力行と 島地默雷
 歲 寒 窓 放 言 庚 洲 老 人 差 別 平 等 說 島 地 默 雷 的 交 際

第六輯 目次

人 生 ノ 目 的 寺 田 福 壽 佛 教 と 厭 世 教 赤 松 連 城 總 合 宗 教 論 平 井 金 三
 人 生 ノ 原 理 釋 雲 照 利 他 ノ 行 ナ キ 者 ハ 人 ニ ア ラ ザ ル 說 島 地 默 雷 佛 教 ト 日 本 國 井 上 圓 了
 擇 善 勤 行 南 條 文 雄 精 神 世 界 原 坦 山 公 私 ノ 是 非 ヲ 論 ス 荻 野 獨 園
 天 地 ト 靈 覺 ト ノ 觀 念 高 田 道 見 彌 陀 ノ 實 驗 果 シ テ 如 何 小 川 寺 周 賢 佛 教 原 理 ノ 楷 梯 神 谷 大 周
 破 邪 ノ 用 心 大 内 青 樹 疫 癘 章 解 島 地 默 雷 不 思 議 辨 島 尾 得 庵
 眞 理 ヲ 忘 用 ス ル 勿 レ 織 田 得 能 解 惑 一 章 今 立 吐 醉

第七輯 目次

器 說 島 地 默 雷 無 益 論 島 尾 得 庵 身 心 ノ 關 係 大 内 青 樹
 示 佛 知 見 高 田 道 見 佛 教 ハ 哲 學 ナ ル カ 將 タ 村 上 專 精 萬 物 ノ 本 體 織 田 得 能
 生 滅 無 常 島 地 默 雷 人 生 道 義 ノ 必 要 ニ 就 テ 村 上 專 精 學 佛 者 ノ 安 心 釋 雲 照
 阿 羅 漢 道 高 田 道 見 精 神 歸 着 實 驗 論 吉 谷 覺 齋 道 の 說 姫 宮 大 圓
 人 畏 ル 所 ナ カ ル ベ カ 南 條 文 雄 空 華 集 ヲ 讀 テ 五 山 文 字 加 藤 熊 一 郎 佛 法 入 門 一 夕 話 松 濤 泰 成
 ラズ 格 物 致 知 ト ハ 何 ソ ヤ 江 村 秀 山 因 縁 生 ノ 說 齋 藤 聞 精 萬 法 唯 心 原 坦 山

舞倫終始論大洲鐵然歲寒窓放言虞淵老人 檀 論島地默雷

第八輯目次

佛教の興廢論島地默雷 學教の衝突澤柳政太郎 沙門の大道高田道見
教の心得島地默雷 虛舟 獨語釋宗演 宗教政治教育の原則釋雲照
教法者の志操原坦山 精神の衛生法佐々木東洋人 道の九難高田道見
使用善惡島地默雷 學者と信者小泉了諦 海印三 味小栗栖香頂
日本佛教の沿革概略釋宗演 妄相分別の始起如何吉谷覺壽 平等 覺林 道永
宗門の本旨荻野獨園 歲寒窓放言虞淵老人

第九輯目次

道德の標準渥美契縁示 教利 喜南條文雄 佛教に就ての疑問に答 吉谷覺壽
病問剩語(二)大内青樹 修林 設笠原研壽 活論平井金三
信の林 用小栗栖香頂 佛教と日本井上圓了 教と法との別田中智學
理入行 入土岐善靜 永世不變島地默雷 人世の目的如何高田道見
解開 論大内青樹 日本德育の基礎楠田英世

第十輯目次

愛慾は愚蔽の根本なる 高田道見 供養の眞實義高田道見 天地萬物皆わが影石村貞一
慈有佛 性島地默雷 天台 宗大意前田慧雲 悲哀の境遇に會はざる 人け善提心を發するこ 堀内靜字
三綱領略解釋 雲照三 難通 釋藤谷運由 安心立命の範圍は如何高田道見

信仰の順序澤柳政太郎 建立 得 失福田行誠 禪客 問 答原坦山
佛教一夕話佐々木狂介 修因 感 果中山理見 古印度の文法起源南條文雄
妙 法原坦山 托鉢 說瀧谷孫宗 男女 關 係島地默雷

第十一輯目次

本は一に非るの說島地默雷 佛教と生存競争堀内靜字 煩悶 即菩提多田增辨
佛の字の利剛に就て石村貞一 天下 和 順赤松連城 教海 一致論村上專精
淫欲の根本高田道見 佛法は機縁に隨て分る松村翠樹 密宗 祈禱釋雲照
偶 像大内青樹 高遠の理を談して道の 佐々木狂介 實相と因果との關係江村秀山
佛法興隆論釋大智 神聖の 說蘆津實全 呈江湖諸兄弟書荻野獨園
三寶略 說島地默雷 日本入種の永續を謀る には先づ國教の基礎を 反巳小次郎 宗教と道徳村上專精
無明 說細川千巖 堅牢にせざる可からず 寒窓放言虞淵老人 身體 作 用島地默雷

第十二輯目次

學道ノ要旨高田道見 活佛教話解釋島地默雷 塔の 考南條文雄
大同 論大内青樹 日本淨土宗縁起福田行誠 嚴防 誘惑島地默雷
出離の要道高田道見 依教分宗の料簡織田得能 佛教修身論細川千巖
言說 論島地默雷 接 待 偶 談福田行誠 善惡 一 念島地默雷
多力と最明高田道見 眞宗 大意渥美契縁 空と因 果釋大智
佛教の西漸堀内靜子 斷帶二見 論島地默雷 如何なるか是れ眞理島地默雷
修學の要領島地默雷 歲寒窓放言虞淵老人

校訂 大乘起信論義記 全

全一冊和裝

正價十六錢

郵送料四錢

此書ハ諸宗ノ教科書トシテ採用セラレ佛教初學者ニ必要ナルハ素ヨリ言ヲ待
 タズ而ルニ從來流布ノ書ハ價格不廉ナルガ上ニ訓點ナク印刷不明ニシテ讀ミ難ク且
 ツ數冊ニ分レタレハ携帶ニ便ナラサルニ付キ今般本館ニ於テ丁寧ニ校訂シ送り假名
 フ正シ句讀ヲ施シ之ヲ鮮明ナル活版ヲ以テ上等洋紙ニ印刷シテ誦讀ニ便シ上層及左
 右ニ充分ノ餘白ヲ存シテ書入レニ便シ三本五卷ヲ全一冊ニ纏メテ携帶ニ便シ特ニ非
 常ノ廉價ナルヲ以テ眞宗大谷派中學寮、東京哲學館ヲ始メ其他各宗中學林教校及ビ
 講習會等ノ用書トナリタリ

各宗中學寮 及中學林漢文學教科用 織田得能師編 **和漢高僧傳** 和本全三冊 定價金六拾錢 全部出來 郵税金六錢 「此字引」全一冊郵送料共金廿五錢

本書ハ各宗中學寮并ニ中學林其他諸教校ノ漢文學教科用書ノ需用ニ迫ラレ博識高得ノ織田得能師特ニ意ヲ注イテ編纂セラレタルモノナレバ其漢文讀本用ニ適切ニシテ

歛クル無キヤ昭ナリ昨年ヨリ既ニ京都本願寺清韓語學研究所大谷派本願寺中學寮ヲ始メ東京大谷派第二中學寮、越前福井大谷派中學寮、越中高岡大谷派中學寮、越後高田大谷派中學寮、美濃大谷派中學寮等ノ教科用書ニ採用サレルヲ以テ敢テ本館ノ贊言ヲ要セサルハシ今又禪宗諸派ノ學林并ニ教校ニモ採用ノ榮ヲ賜ハラントス弊館ノ光榮之ニ過キス

卷之上目次

- 道安 ●慧遠 ●羅什 ●法顯 ●達磨 ●曇鸞 ●真諦 ●慧文 ●慧思 南岳 ●慧遠 淨影 ●智顓 天台 ●吉藏 ●杜順 ●道綽 ●玄奘 ●道宣 南山 ●弘忍 ●善導 ●窺基 慈恩 ●普光 ●道昭 ●慧能 曹溪 ●法藏 賢首 ●義淨 ●善無畏 ●一行 ●金剛智 ●行基 ●鑑真 ●不空 ●湛然 荆溪 ●善珠 秋徭 ●澄觀 清涼

卷之中目次

- 最澄 傳教 ●空海 弘法 ●宗密 圭峰 ●眞如 ●圓仁 慈覺 ●義玄 臨濟 宗祖 ●明詮 ●良价 曹洞 宗祖 ●圓珍 智證 ●本寂 曹山 ●仲算 ●光勝 空也 ●良源 慈懸 ●眞興 子島 ●源信 ●知禮 四明 ●子增 長水 ●契嵩 明教 ●淨源 晋水 ●元照 靈芝 ●永觀 ●克勤 碧巖 ●良忍 融通 宗祖 ●貞慶 解脫 ●榮西 建仁 開祖 ●高辨 明慧 ●辨長 鎮西 派開祖 ●證空 西山 派開祖

卷之下目次

●道元永平寺開基 ●親鸞真宗開祖 ●辨圓東福寺開基 ●日蓮日蓮宗開祖 ●祖元圓覺寺開基 ●
 睿尊興正 ●普門南禪寺開基 ●凝然 ●紹瑾總持寺開基 ●妙超大徳寺開基 ●師鍊虎關 ●疏石
 天龍寺開基 ●慧玄妙心寺開祖 ●宗純一休 ●眞盛眞盛派開祖 ●明忍 ●株宏雲棲 ●天海南光坊
 ●宗彭澤庵 ●知旭藉益 ●文政 ●隆琦隱元 ●道光 鐵眼 ●慈山妙立 ●契冲 ●忍叡 ●光謙
 靈空 ●慧鶴白隱 ●普寂 ●飲光慈雲 ●癡空慧澄

第壹號參版第貳號以下再版せし故欠本なし何號にても何冊にても貴需に應ず

定價 券代用一割増

一部六錢 ●十部前金六十錢 ○●全國無遞送料郵前金ニアラザレバ一切發送セズ



禪學第一卷第一號より第十號迄の目次中重なるものを擧ぐれば左の如し

- 禪學の欄には○正傳三昧○禪機禪語○親參實究○神道○即心是佛○無情說法○元旦上堂○參師と工夫
- 講義の欄には○前南禪寺管長勝峰大徹禪師提唱侍者私記の臨濟錄○大内青巖居士の從容錄○山田孝道師の坐禪用心記(完結)○禪東崖禪師提唱釋湖南校訂の心玉銘鏡○釋哲巖師の證道歌(完結)○若生國榮師の寒山詩○山田孝道の法寶壇經等極めて平易に詳解えたる講義毎號二十五ページ宛載せたり

- 史傳の欄には○佛光禪師○雪村禪師○桃水和尚○蒼龍老漢○鐵眼禪師○白隱禪師○心越禪師○鈴木正三○愚堂禪師○關山禪師○正受老人○拔隊禪師等の最も詳細なる傳を載す

- 法語の欄には大智禪師の十二時法語○鐵眼禪師の五蘊○東嶺禪師の奉大聖寺宮○澤水禪師の工夫疑團を示す事○夢想國師の神通妙用○天柱禪師の無明○拔隊禪師の成佛の直路を知るべし○澤水禪師の垂示○正三老人の示武士法語等なり

- 漫録の欄には○銅瓶鐵鉢餘談○懶窠抄筆○禪榻夜話○獨語○芝山隨筆○泥舟士の話○隨感隨筆○漫言一則○禪庭評語○糟粕錄釋宗演 ○戰利品來遠號の鐘の寄附に就て高津柏樹

- 論說の欄には○邪を禪破す楞伽道人○禪學指針論高田道見 ○楞伽道人の邪禪論を讀て聊か所感を述べ松崎覺本○禪は佛教の粹なり藤津實全

- 繪は毎號大家の筆になる婆子燒庵の圖楠公湊川の極俊禪師に謁する圖無着文珠を打つの圖無外禪尼が桶底脱脚の圖玄虎藏主が眉尖刀を揮ふて禪客と接するの金牛和尚飯桶を持って舞を作し禪衲を接するの圖出山の釋迦の圖賢女屍林の圖盤山省悟の圖等なり

- 雜報欄には禪學に關する時事評論を掲ぐ
- 第八號には新年附録として謠曲「山姥」の圖文章禪師のねころび草虛舟一夕話并に發賣書籍目録を添ゆ

● 卷二 第壹號

禪學は發行以來日猶は淺しと雖も頗る江湖の好評を博し逐號二版三版を重刊し今や第一卷は既に十號に達し居然禪海唯一の好船筏たるの榮を致せり依て本月發刊の二卷第一號より紙面を改良し記事を精撰し從來掲載せる諸篇の外禪學文學的の趣味に饒める諸種の佳篇を蒐録して更に一段の光彩を煥發し益江湖の望に副はんことを勤むべし

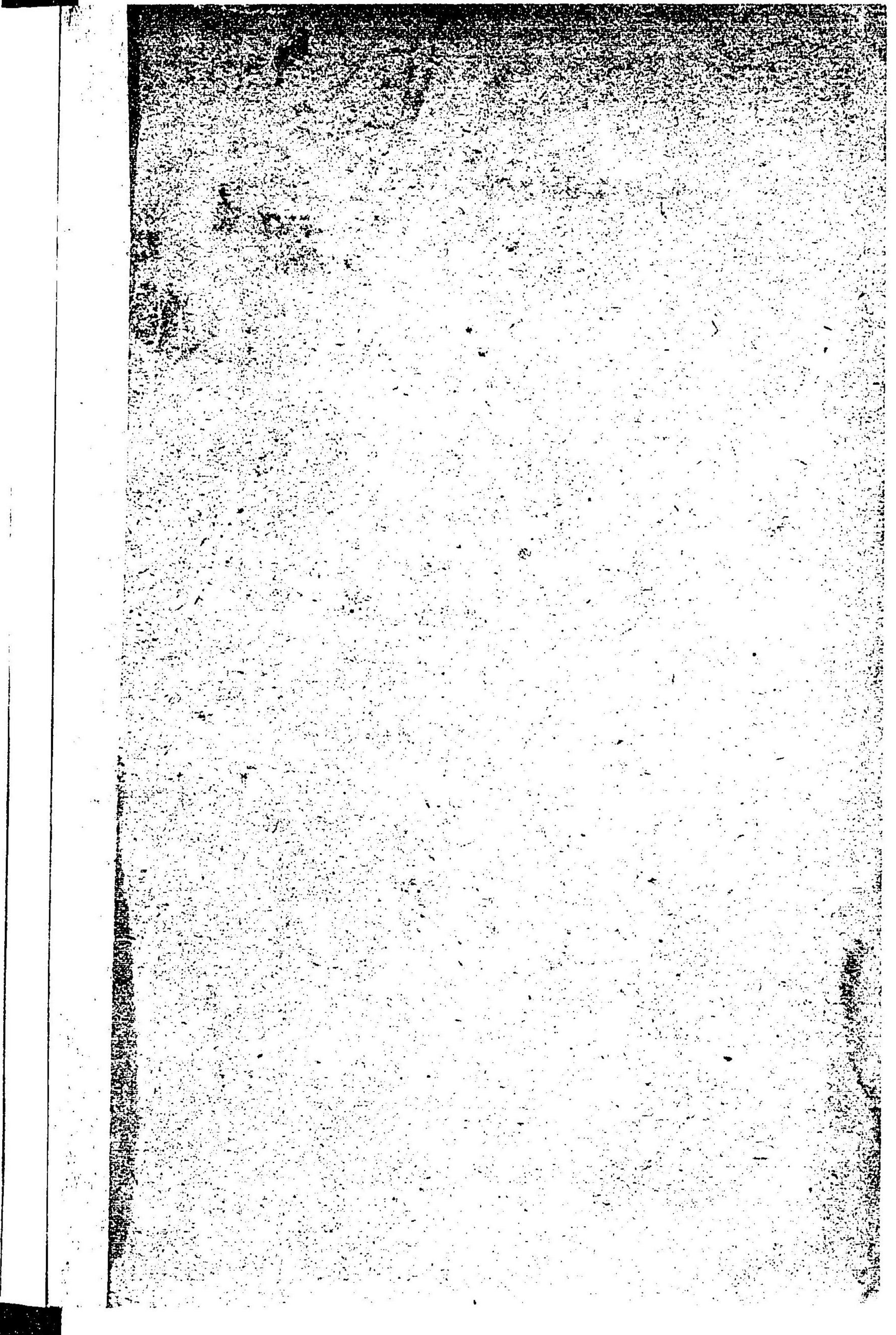
前南禪寺管長 勝峰大徹禪師題字
 希有庵主 渡邊南隱禪師題字
 永平寺管長 森田悟由禪師題字
 寺山星川居士序文
 山田孝道師校註

● 校補 禪門法語集

大美本文字入紙數七百五十頁
 總クローズ仕立正價壹圓貳拾錢
 郵送料金拾四錢

● 總目次

光明藏三昧 妻鏡 大智法語 十二時法語 二十三問答 援隊法語
 撫山和泥合水集 月庵法語 一休法語 一休骸骨 不動智神妙錄 盲安杖
 鐵眼法語 無難法語 三歸夜話 岸江小語 莫安想 西來法語
 供養參 行乞篇 寶鏡窟記 夜船閑話 身知夢 誠殺生法語
 白隱法語 諫羅天釜 寶鏡窟記 夜船閑話 身知夢 誠殺生法語
 江油の大喝采中に發兌したる本書は臨濟曹洞黃檗三派古徳假名法語の華を擇ひ萃を
 扱きたるものにて丁寧親切に註譯をも施したれば初心の婦女も亦容易に文學者以
 得べし佛教徒は素より言を嫉たず軍人は以て膽力を鍛鍊し軍機を撥轉し文學者以
 て幽遠高妙の思想を涵養すべし





特 18

5

座 禪 用 心 記 講 義
普 勸 座 禪 儀

国立国会図書館

019448-000-0

特18-5

坐禪用心記・普勸坐禪儀講義

山田 孝道/著

M29.5

ABG-0161

